

531
70



始



531
70



文選

大正
15. 6. 7
内交



小川破笠筆 芭蕉像
四日市 鈴木廉平氏藏

柳文書

後井乙男編



月溪筆 七佛仙之圖

331-70

俳文俳句選目次

俳文

| | | | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 柴門辭 | 贈新道心辭 | 燒蚊辭 | 鉢扣辭 | 四梅盧賦 | 旅賦 | 百蟲譜 | 百魚譜 | 臍頌 |
| | | | | | | | | |
| 松尾芭蕉 | 僧丈草 | 松倉嵐蘭 | 向井去來 | 僧李由 | 橫井也有 | 同 | 同 | 同 |
| | | | | | | | | |
| 一 | 二 | 三 | 五 | 六 | 八 | 三 | 九 | 二四 |

| | | |
|--------|------|---|
| 蓑蟲說 | 山口素堂 | 二 |
| 嘲宵惑說 | 北山毛執 | 二 |
| 長雪隱解 | 森川許六 | 二 |
| 藪醫者解 | 松井汝村 | 三 |
| 落柿舍記 | 向井去來 | 三 |
| 幻住庵記 | 松尾芭蕉 | 三 |
| 十八樓記 | 同 | 三 |
| 芭蕉堂再興記 | 谷口蕪村 | 三 |
| 鹿島紀行 | 松尾芭蕉 | 四 |
| 宇治行 | 谷口蕪村 | 四 |
| 遠千鳥序 | 上島鬼貫 | 四 |
| 宴柳後園序 | 各務支考 | 四 |
| 銀河序 | 松尾芭蕉 | 四 |

| | | |
|-------|------|---|
| 鼻箴 | 横井也有 | 四 |
| 嵐蘭誄 | 松尾芭蕉 | 五 |
| 俳諧發願文 | 僧浪化 | 五 |
| 公平傳 | 松井汝村 | 五 |
| 物忘翁傳 | 横井也有 | 五 |
| 妖物論 | 同 | 五 |
| 手足辯 | 松井汝村 | 五 |
| 葛の翁の贊 | 谷口蕪村 | 六 |
| 奈良團贊 | 横井也有 | 六 |
| おらが春 | 小林一茶 | 六 |

牡丹
露の世
年の暮

笈の小文 松尾芭蕉 四
發端
 奥の細道 松尾芭蕉 六

俳句

| | | | |
|------|-------|------|------|
| 山口素堂 | 杉山杉風 | 岩田涼菟 | 各務支考 |
| 上島鬼貫 | 松尾芭蕉 | 路通 | 志田野坡 |
| 井原西鶴 | 小西來山 | 森川許六 | 廣瀬惟然 |
| 北村季吟 | 西山宗因 | 凡兆 | 僧浪化 |
| 山本西武 | 松江重頼 | 向井去來 | 園女 |
| 松永貞徳 | 安原貞室 | 服部嵐雪 | 僧丈草 |
| 山崎宗鑑 | 荒木田守武 | 智月尼 | 榎本其角 |

| | | | |
|------|-------|-------|------|
| 中川乙由 | 横井也有 | 正岡子規 | 内藤鳴雪 |
| 炭太祇 | 谷口蕪村 | 河東碧梧桐 | 高濱虚子 |
| 大島蓼太 | 堀田麥水 | 村上鬼城 | |
| 高井几董 | 黒柳召波 | 連句 | |
| 僧大魯 | 加藤曉臺 | 猿蓑 | |
| 高桑蘭更 | 加舎白雄 | 市中 | |
| 井上土朗 | 安井大江丸 | 炭俵 | |
| 鹽田冥々 | 小林一茶 | 梅が香 | |
| 櫻井梅室 | 成田蒼虬 | 秋の空 | |

俳文俳句選 目次終

文學博士 藤井乙男編

俳文俳句選

東京 修文館發行

凡例

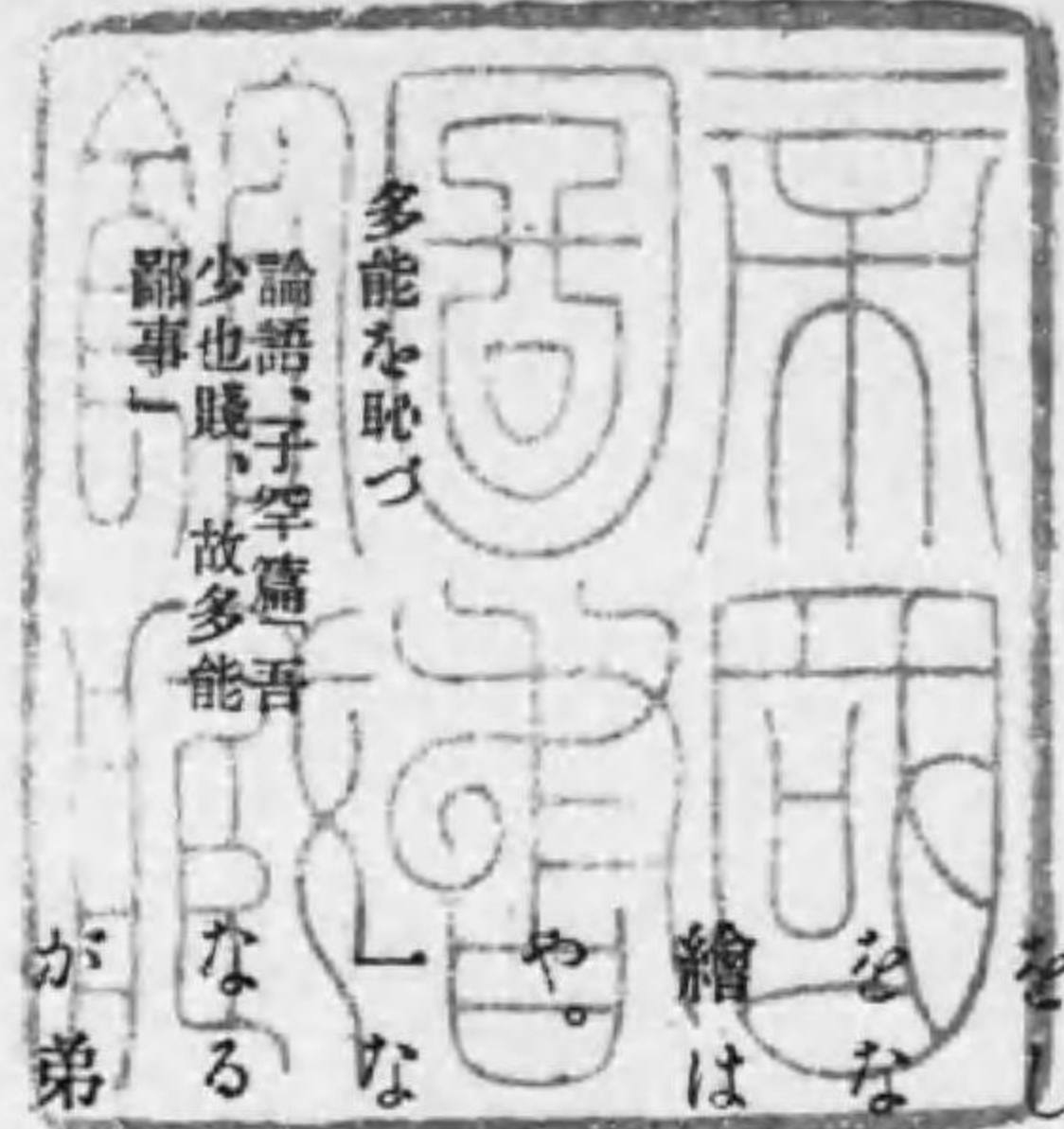
- 一、本書は、高等學校の講讀用として編纂したるものなり。
- 一、俳文は、主として元祿時代のものより之を採擇し、也有の俳文八篇と蕪村及び一茶の文章各三篇とを併せ載せたり。
- 一、なほ本書には俳句及び連句を添ふ。俳句は、各時代の作例を示して斯道の推移を知らしめんとし、連句は、二三有名なるものを選びて其の一斑を窺ふよすがとしたり。
- 一、俳句は俳文の一章又は二章を授けて、なほ時間に餘剩ある際、便宜之を課するもよかるべし。

俳文

柴門、辭

芭蕉

去年の秋
元祿五年



多能を恥づ
論語、子罕篇、吾
少也賤、故多能
鄙事

去年の秋、かり初に面をあはせ、ことし五月のはじめ、深切に別を
 せむ。其のわかれにのぞみて、ひとひ草扉をたゝいて、終日閑談
 をなす。其の器繪うつはものを好み風雅を愛す。予こゝろみに問ふ事あり。
 繪は何の爲好むや。風雅の爲好むといへり。風雅は何の爲愛す
 や。畫の爲愛すといへり。其のまなぶ事二つにして、用をなす事
 一なり。まことや君子は多能を恥づといへれば、品二にして、用一
 なる事感すべきにや。畫はとつて予が師とし、風雅はをしへて予
 が弟子となす。されども師が畫は精神微に入り、筆端妙をふるふ、
 其の幽遠なる處、予が見る所にあらず。予が風雅は夏爐冬扇のご
 とし、衆にさかひて用る所なし。たゞ釋阿、西行のことばのみ、かり

釋阿
俊成の法名

柴門、辭

後鳥羽上皇の
後鳥羽院御口傳

初にいひちらされし、あだなるたはぶれごとも、あはれなる處おほし。後鳥羽上皇のかゝせ給ひしものにも、これらは歌に實ありて、しかもかなしびを添ふるとの給ひ侍りしとかや。されば此の御こと葉を力とし、其のほそき一すぢをたどりうしなふ事なかれ。猶古人の跡をもとめず、古人のもとめたる所をもとめよと、南山大師の筆の道にも見えたり。風雅も又これに同じといひて灯をかゝげて、柴門の外におくりてわかるゝのみ。

(風俗文選)

南山大師
空海

贈新道心辭

丈 草

世をのがれて道を求むるほどの人は、皆一かどの志を發して、まことしきつとめどもしあへれど、年を重ねぬれば、又かれこれにひかるゝ縁おほく、事繁くなりて、更にはじめの人ともおもほえぬふるまひのみぞおほかる。古人も此事をいましめて、出家は出家以後の出家を遂ぐべきよし、勸めはげましぬ。魯九子は美濃國蜂屋

の山里にあそびて、いまださかんなる齡のいかなる縁にや、俄に墨の袂に染めかへて、塵のすみかをかけ出で、山寺にかきこまれるよし、傳へ聞き侍りて、今のこゝろざしの正しきに、猶後の出家をおこたらぬみさをのほどをねがひて、拙き辭を申しおくりぬ。

蚊屋を出て又障子あり夏の月

(風俗文選)

燒蚊辭

嵐 蘭

蚊、蚊、帳中の蚊、汝を焼くに辭をもてす。汝此の辭を聞く時は、わが手に死すとも、自ら足れりとせよ。それ澤雉は樊中にやしなはれんことをねがはずと。彼は心をとる、これは食をもとめて、人の肌にせまる。かれを愛せんや、これをにくまんや。きゞすは草にかくれて、草の爲にやかる。汝は帳に入つて、帳の爲にやかる。あはれなるかた、いづれとかせんや。

蟬、促織の火に入るは、戀ゆるときけばわりなしや。雨に濡れ露

燒蚊辭

三

澤雉
莊子養生主「澤雉十步一啄、百步一飲、不斲菑於樊中」

須山小宮山が夜討
元弘元年九月二
人の夜討により
笠置城没落す

跣躑
魯の盜跣、楚の
莊籛共に大賊な
り

にそぼちて、さそはれし風だにもつらし。げに玉の緒の絶えなん
事もしらず、いく偽の夜や頼み來し。汝がやかるゝ事、何を情とせ
ん。義經の逆落は、暫時さしおく。須山小宮山が夜討は、かくれて
謀をなすといへども、天下の爲にして、名おのづからしたがつ。又
汝といはんや。虞舜は頑父をさげ、日本武尊は夷賊をのがれ給ふ。
共に天にして、汝といふべきにあらず。大盜あに樞戸を穿たんや。
汝がふるまふを見るに、帳をたるゝ時は、其翻々の間をうかゞひ、垂
れをはつて縦横の透間をたづね、すべて小破の所をもとめ、人のし
りへにつきて入らんとはかる。嗚呼跣躑が徒にはあらじ。
すべて汝のおこなふ所、猛き事もなく、たのしむ事もなく、あはれ
なるかたにも、やさしきかたにもあらず、たゞ憎むべきものの甚し
き也。

蚊、蚊帳中の蚊、汝を焼くに辭をもてす。汝此ことばをきく時は、
我手に死すともみづから足れりとせよ。

子や啼かん其子の母も蚊の喰はん

(風俗文選)

鉢扣辭

去 來

子や啼かん云々
憶良「憶良らは
今はまからん子
母泣くらん其子
んぞ」

師走も二十四日、冬もかぎりなれば、鉢たゞき聞かんと、例の翁の
わたりましける。こよひは風はげしく、雨そぼふりて、とみにも來
らねば、いかに待ちわび給ひなんといふかりおもひて、

箒こせ真似ても見せん鉢扣、と灰吹の竹うち鳴らしける、其の聲
妙也。火宅を出でよとほのめかしぬれど、猶あはれなるふし、
の似るべくもあらず。かれが修行は瓢箪をならし、鉦打ちたゞき、
二人三人つれてもうたひ、かけ合ても諷ふ。其の唱歌は空也の作
也。かくて寒の中と春秋の彼岸は、晝夜をわかす、都の外、七所の三
味をめぐりぬ。無縁の手向のたふとければ、かの湖春も、わが家は
づかしとはいへり。常は杖のさきに茶筌をさし、大路小路に出で
て商ふ。業かはりぬれど、さま同じければ、たゞかぬ時も鉢扣とぞ、

七所の三味
鳥部野、阿彌陀
峯、新黒谷、船
岡、西院、孤塚、
金光寺

わが家はつかし
一米やらぬ我家は
づかし鉢叩

た、かぬ時も
一面白や叩かぬ時
も鉢叩

月雪に名は
一月雪や鉢たき
名は甚之丞
ことごとく
はやらじ鉢叩

長嘯の墓
西山花の寺にあ
り攀白集に鉢た
ききの文あるな
り

曲翠は申されける、あるひはさかやきをすり、或は四方にからげ、法師ならぬすがたの衣引きかけたれど、それも墨染にはあらず、おほくは萌黄に鷹の羽打ちちがへたる紋をつけて著たれば、月雪に名は甚之丞と越人も興じ侍る。されば其角法師が去年の冬、ことごとく寢覺はやらじと吟じけるも、ひとり聞くにや堪へざりけん。打ちとけて寝たらんは、かへり聞かんも口をしかるべし、明かしてこそとの給ひける。横雲の影よりからびたる聲して出で來れり。げに老ばれ足よわきものは、友だちにもあゆみおくれ、ひとり今にやなりぬらんと、翁の

長嘯の墓もめぐるか鉢たきと聞え給ひけるは、此あかつきの事にてぞ侍りける。
(風俗文選)

四梅廬賦

李由

恙を怖れたる時は、窩つちあなに住居し、氷の雨の用心とて、岩窟の所々に

凡鳥
鳳の字を分けば
凡鳥の二字さな
る
山鳩
月令「鳩化爲鷹」
蝸牛の釜云々
童謡「出々虫々
々々角出せ棺出
せ出されば釜わ
らう」

残りたる世もあるに、廂に孫庇をおろし、下側にしころをつけて、民の窟の賑ひけるこそめでたけれ。堅田の蟹の舟に年を重ね、乞食は橋の下に子を産むたぐひ、鶯の巢のやさしく、鳥の巢のふつつかなる、皆おのれくが生得なり。ことしの秋、予ひとつの巢を營む。燕の土をはこび、蟻の塔をくみて、四根の梅をたより、頬白の家をかゆるたぐひにはあらで、病鶏が時に憑む、鳳凰の威をふるはんよりは、凡鳥の嘲りなからん事を喜ぶ。山鳩が逸物の鷹と吹き上げらるゝも心ぐるしく、たゞ一日の閑鷗とおぼえて眠る。蝸牛の釜打破らんとせがまれては、又出て蛞蝓の部とのらめく。蛇の貝の半造作、榮螺の蓋の戸もつらぬ住居ながら、風雅の友の入り亂れ、賓主寄居虫がうなの家をわすれて、例の夜鷹の寄合よとはやされてたのしむのみ。
(風俗文選)

旅 賦

也 有

金谷島田に云々
大井川の出水に
よりに川どめに
なれる也

十團子
宇津谷峠の名物
「十團子も小粒に
なりぬ秋の風」
許六
許六が賦、風俗文
選旅の賦、風俗文
出女の盛衰、同上
出女の説、同上

春は乗かけの鈴なりて、浴衣染の花やかなるは、參宮の都道者か。
夏は五月雨のかきたれて、金谷島田に大名の市をなし、秋は木曾路
の木々も紅葉して、猿三聲の涙ひとり行脚の頭陀をうるほし、冬は
鈴鹿の吹雪に飛脚の足を定めかねたる、いづれもとりの哀な
るべし。五十三次の紀行は、あまねく人の言ひ古せど、多くは歌よ
み連歌師のぬめりに、小夜の中山に旅寢の詞をつゞけ、宇津の山邊
の蔦にまとはりて、十團子のさびしさは知らず。さらねば寺社舊
跡の由來書、道の方角の詮義に落ちて、猶俳諧に拾ふべきものは殘
れり。許六が賦に、馬方の境界を盡し、木導が説に、出女の盛衰を述
べたり。強ひてそのまねびせんとはあらねど、例の腹ふくるゝ
わざなればならし。旅の衰といへば西行の笠しめつけ、宗祇の草
鞋の跡を思へど、大名の往來とても、たとへ煙草盆の銀金物はかゞ

畑峠
箱根山中の小驛

やけど、竟日きやうじつの駕籠に足をいたため、緞子の夜著に雨もりを聞くも、旅
ならずしてはいかでかは。いでや本陣の夕暮は、たて砂に幕をひ
るがへし、すすする馬の尻をならべ、亭主が鬢はそゝけながら、上下
に泥足をすすぎて、塗臺に小鯛のはね廻りたるは、さすがに草枕と
は言ひがたかるべし。下宿のさまは引劣りて、見せ先に居風呂ふ
すぼり、小ぐらき行灯の陰とり廻して、ねころぶものは、木枕に虱を
つぶし、まだ寝ぬ者は取かへ錢の勘定にのゝしる。人よぶ手拍子
の鳴らぬこそことにわびしけれ。月おち馬いなゝき、草鞋うり、焼
酎うり、按摩けんびきの聲もをさまりて後、拍子木丁々として、これ
らはいかめしき旅の一體なり。すべて旅籠屋の庭の氣色は、蘇鐵
つくり、松を植ゑぬはなし。畑峠には山水をしかけ、大磯、小田原に
は小石をまきちらす。塀にしのびがへしはありながら、大戸のか
けがねはひずみてかゝらす。湯殿は無性にひろくて、晝鼠を迷は
し、雪隠の疊は座敷よりつらなりて、張付の裏梅もあらぬ匂ひに破

ぬけ参
丁稚小僧などの
主人に毎断にて
伊勢参宮するも

れかゝり、蛩の啼くこそ哀なれ。膳にはいなだの鱈かすかに、鯉の
焼物、大根葉のあへ物、壺皿の豆腐にきざみ昆布の味も覺束なく、箸
のふときはいく度もけづり直さんとにや、いとうるさし。出女を
赤前垂とは、都にちかき名のみなるべし。宵は返辭の尻輕に立廻
り、鼻歌に雨戸はしらかすも、今宵いかなるさゝやきの橋をかけた
る契もとこそゆかしけれ。沓、草鞋、笠の頭甲は、ゆく先々の店につ
るし、あやしのはなれ屋には、竹につけて道ばたにも出せり。赤表
紙の道中記、おもりに鐵鑊をさげ、櫃の牡丹餅にはすゝ黒き雜巾を
覆ふ。箱根の赤腹は卷わらにさし、梅澤の鮫鱈は鍵にかけて軒に
つるす。されば日よりは天道次第ながら、さしも大井川は膝たけ
にこして、思はぬ酒匂に二日留められたる、荒井の茶屋の鰻のあた
らしき日は親の精進にあたりて、ひしげたる小家に日越しの焼餅
をくふなど、昨日は絹賣に道づれして、大濱に温飩をふるまはれ、今
日はぬけ参の介抱して、天龍の川風に新らしき笠をとられたる、哀

大坂番
大坂城の守護の
爲に上下する武
士
女院の六道云々
建禮門院の六道
の物語、平家物
語にあり
塞入無爲の云々
涅榮經一葉恩入
無爲、眞實報恩
者

樂日々に移りかはりて、幸と不幸は首途の吉日にもよらぬなるべ
し。旅に哀を知るとは、その行客なびの身の上のみならず、駕かる人
はかく人の達者を羨めども、駕かく人はかる人の錢をうらやむ。
小揚の合言葉はいつの世よりの洒落ならん。やみげんことは三
十五文にして、またと坂東とは二十八文なるべし。朝は鳥羽の早
追にはしり、晩は姫路の女中をつりて、身は定めなきむら時雨、雲助
のゆく末もいとこゝろもとなし。疝氣ぜんき陰囊いんたうの川越の首に髭奴の
またがりて、及ばぬ富士をながめたるも、片目の馬かたの、座頭のせ
くらがり峠こすも、いづれ世わたりの悲しからぬかは。それが中
にも、口の過ぎたる船頭は大坂番にたゝかれ、鼻の落ちたる餅屋は
六十六部にさへきたなまれぬ。誠に一生涯のありさま、觀すれば
みな旅にして、世を旅の空にたとへたるは、假の住居といふのみに
あらず。樂みも苦みも行くさきに見盡して、たとへ女院の六道の
沙汰とても、是に漏れざるべし。たゞ、俳諧師のなる果のみぞ、乘恩

入無爲のしめしも待たず、ふつゝかにあたま丸めて、吉野、初瀬の春をゆかしみ、松島、象潟の浪にうかれ廻り、三文ぬぎりて戻り馬にはぐれ、乗合なくてわたし舟も出さず、誰が爲ならぬ雨にもぬれ、月にも道法をつもりちがへて、氣の毒の山かげに、一夜は一つ家の情をかりて、すゝき折りたく圍爐裏ばたに膝皿あぶりながら、虫齒やむ子にまじなひ教へて、稗團子のもてなしにあふ。あるはしるべの古寺を尋ねれば、和尚は漢和もすこしなりて、足のぬけたる碁盤になぐさみ、五、六日の名残を惜まれて、松茸に喰ひあきたるなど、水雲萬里をうかれありきて、ほだしなき身の安さながら、その下人を孫平とは、我が伯母聲の名なるものをと、ふと故郷の戀しき折もあるべし。われ仕官十年の間、木曾路、東海道の線言ながら、のぶれば行程千四十里ばかり、猶ながらへていかばかりの旅行もしらねど、ことしは齡も四十の老ちかく、しきりに懷舊感慨の情に忍びず。旅の賦一章を書きて寓居の筆をつひやすも、誠はあぢきなきすさ

びなるべし。

(鴉 衣)

百 蟲 譜

也 有

籠にくるしむ
宗因「もしなか
ば蝶々籠の苦を
うけむ」

蜂の他の鳥をさり
て云々
似我蜂のこと

蝶の花に飛びかひたる、やさしきものの限なるべし。それも啼く音の愛なければ、籠にくるしむ身ならぬこそ猶めでたけれ。さてこそ、莊周が夢も此物には託しけめ。只蜻蛉のみこそ、かれにはや、並ぶらめど、糸につながれ、繭にさゝれて、童のもてあそびとなるだに、苦しきを、阿呆の鼻毛につながら、とは、いと口をしき諺かな。美人の眉にたとへたる、蛾といふ虫もあるものを。

子を持てるものは、その恩愛にひかされてこそ苦勞はすれ。蜂の他の虫をとりて我子となす、老の行術をかゝらんとにもあらず、何を譲らむとてかくは骨折るや、我に似よくとはいかに己が身を思ひあがれるにかあらむ。花に狂ずるとは詩人の稱にして、歌にはさしも詠まず。蜜をこぼして世のためとするはよし。只

人目稀なる薬師堂に、大きな巢作りて、掃除坊主をおびやかさんとす。それも針なくば人には憎まれじを。

蛙は古今の序にかゝれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。朧月夜の風しづまりて遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで翁の目さましたれば、此物のこと更にも誇りがたし。

蟬はたゞ五月晴に聞きそめたる程がよきなり。やゝ日ざかりに啼きさかる比は、人の汗しぼる心地す。されば初蝶とも初蛙ともいふ事をきかず、此物ばかり初蟬といはるゝこそ、大きな手がらなれ。やがて死ぬ氣色は見えすと、此のものの上は翁の一句に盡きたりといふべし。

螢はたぐふべき物もなく、景物の最上なるべし。水に飛びかひ草にすたく、五月の闇はたゞこの物の爲にやとまでぞ覺ゆる。しかるに貧の學者に取られて、油火の代にせられたるは、此のものの本意にはあらざるべし。歌に螢火とよませざるは、ことの外の不

やがて死ぬ
芭蕉「やがて死
ぬけしきは見え
ず蟬の聲」

貧の學者
車胤の故事

自由なり 俳諧にはその真似すべからず。

日ぐらしは多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕は草に露おく比ならん。つくづくぼろしといふ蟬は、つくし戀しともいふなり。筑紫の人の旅に死して此物になりたりと、世の諺にいへりけり。哀は蜀魂の雲に叫ぶにもおとるべからず。

蜘蛛はたくみに網をむすんで、ひそまつて物を害せんとす。待つくれの歌によまれ、又は退隱の媒ともなりたれど、ひとへに奸賊の心ありていとにくし。古代朝敵の始として、頼光をさへおびやかしたる、いと恐ろし。さはいへ、廢宅の荒れたる軒に、蟬の羽などかけ捨てたるは、いさゝか哀そふ折もあらんか。彼はかひなくし、く巢つくりてこそあれ、東海道にちりばひたる宿なし者をば、蜘蛛はいかでいふやらむ。

芋虫は腹たつものに譬へ、毛虫はむつかしき親仁の號とす。背虫客虫は名のみして虫ならず。油むしといふは、虫にありて憎ま

蜀魂の雲云々
時鳥の異名、時
鳥は蜀の望帝の
生れかはりなり
さいふ傳説あり
待つくれの歌
衣通姫
退隱の媒云々
楚の龔舍蜘蛛の
網を見て仕官を
辭す
頼光をさへ云々
太平記、土蜘蛛

れず、人にありて嫌はる。

蠶の生涯は世の爲に終り、火取虫は誰がために身をこがすや。蟬蛸ははかなき例にひかれ、蓼くふ虫は不物すきの謗となれり。

さは俳諧するものを、俳諧せぬ人のかくいふ折もあるべし。

おなじ寶の名によばれて、玉虫はやさしく黄金虫はいやし。

蟻は明くれにいそがしく、世のいとなみに隙なき人には似たり。

東西に聚散し、餌を求めてやまず。いつか槐安の都をのがれて、そ

の身の安き事を得む。さるも便あしき方に穴をいとなみて、千丈

の堤を崩すべからず。

蠅は歐陽氏に憎まれ、紙魚は長嘯子にあはれまる。

狗の齒に噛まるゝ蚤はたまゝにして、猿の手にさぐらるゝ虱

は、のがるゝ事難かるべし。

虱を千手観音と呼ぶに、蚰蜒は梶原といへり。さるは梶原が異

名なりや、げぢ〜が異名なりや、先後今は知りがたし。

槐安の都云々
淳于夢が夢に見
たる蟻の王國

歐陽氏に憎まれ
憎蒼蠅賦
紙魚は云々
木下長嘯子に紙
魚を憐む辭あり

蝸牛は只水にあるべきものの、いかで草葉に遊ぶらん。家は持
ちたれども、ゆく先々を負ひあるくは、水雲の安きにも似ず。

蛇、蚯蚓の足なくともあるべくは、蜈蚣をさむしの數多きは不用
の事なり。

蟻螂の瘦せたるも、斧を持ちたる誇より、その心いかつなり。人
の上にも此類はあるべし。

蟹のあゆみに譬ふべきものこそなけれ。たゞ原、吉原を、駕にの
りて富士を詠めゆく人には似たり。

促織、鈴虫、くつわむしは、その音の似たるを以て名によべる。松
虫のその木にもよらで、いかでかく名を付けたるならん。毛生ひ

むくつけき虫にも、同じ名ありて、松を枯らし人にうとまる。一在
所に二人の八兵衛ありて、ひとり後生をねがひ、ひとり殺生を

事とす。これ松虫の類なるべし。
きり〜すのつゝりさせとは、人のために夜寒をしへ、藻にす

ついでりさせ
古今集「秋風
旋びぬらし藤
ついでりさせ
きり〜すなふ

藻すむ虫
古今集「あまの
刈る藻にすむ虫
の我がからさむ
こそなからめ世
を怨みじ」

む虫は我からと、只身の上をなげくらんを、養虫の父よと呼ぶは、守宮の妻を思ふには似ず。されど父のみ戀ひて、なとかは母を慕はざるらん。

七賢
晋の稽康、阮籍、
山濤、向秀、劉
伶、阮咸、王戎

蚊は憎むべき限ながら、さすが卯月の比端居めづらしき夕べは、じめて仄かにきつたらむ、又は長月の比力なく残りたるは、寂しきかたもあり。蚊屋釣りたる家のさま、蚊やり焼く里の烟など、かつは風雅の道具ともなれり。藪蚊は殊にはげしきを、かの七賢の夜咄には、いかに團の隙なかりけむ。

佐國は云々
大江佐國の蝶さ
なりし事、發心
集に見ゆ

むかし銀に執心のこせし住持は、蛇となりて錢箱をまとひ、花に愛著せし佐國は、蝶となりて團に遊ぶ。そも俳諧に心とめし後の身、いかなる虫にかなるらん。花に狂ひ月にうかれて、更け行く行燈の影を慕ひ、奈良茶の匂ひに、音を啼くらんこそ哀なるべけれ。

(類 衣)

百 魚 譜

也 有

人は武士云々
一休の狂歌さ
ふる歌、下の句
は「小袖は紅梅
花は三吉野」

人は武士、柱は檜の木、魚は鯛とよみ置きける、世の人の口における、己がさまゝなる物すきはあれども、此の魚をもて調味の最上とせむに咎あるべからず。絲かけて臺にすゑたる男振さへ、外に似るべくもなし。然るを唐土にはいかにしてか殊に賞翫の沙汰も聞えず、是に乗りける仙人もなし。されば夷三郎殿も、他の葉武者には目もかけず、たゞ是にこそ釣もたれ給へ。龍を鱗の司といふは、食味はなれたる理屈にして、さは是を料理せんと學びたる人は、昔愚なる名をもこそとどめたれ。

學びたる人は
莊子の朱弁漫が
屠龍の技を學び
所得たれど見
所なしと見え
り
大聖の御子、名を
鯉さいふ

龍門の瀧に上らんとする魚有りて、おほけなくも大聖の御子にも、此名をからせ給へる。されば世の名聲はかの鯛にも並ばむとす。かれは如何なる幸にかあらむ。味ひ美なりといへども、鯛の料理の品々なるには似るべくもなし。乾物、炙物にせず、鱈、清汁に

よろしからず、くづし、蒲鉾に用ひ難く、鹽にも醋にも調せず。只刺身、あつ物にとゞまるは、多能を恥づといひけんを、中々譽と思へるにや。昔平家に悪七兵衛景清と名乗りて、今民間には泣く子をも威すべく、朝比奈、辨慶にも肩をならべんとす。しかるに記録の上にしては、銚曳しやうびきの外はさせる働なくて、只二郎兵衛も五郎兵衛も同じ列なる侍なり。いかに世に名の事々しきぞと、ある人評したるものあり。かれはたゞ七兵衛が類なるべし。

松江の名産、我朝にも品くだらず。張氏は是を秋風に思ひて仕途を辭し、平家は是を船中に得て官路を進む。進退いづれをか羨むべき。

鮎は近江に洞庭の名をくらべたる、鯉に似て位階おとれり。名には紅葉をかざしたれど、膾は春の賞翫となれり。

鱒は節饗の比もてはやされ、梅咲くころを世に匂ふ。鯖は初秋に祝はれて、空也の蓮の葉に上るは、後生善處の契もた

松江の名産

鮎

張子は云々

晋の張翰、秋風の起つを見て故郷の鱸魚膾を思ふ

平家は是を云々

清盛熊野參詣の途中の事

紅葉をかざしたれど

紅葉鮎

空也

「空也」は「中元」の誤か

のもし。

鯉は芥子醋の風味、上戸は千金にかへむとも思ふらむを、鎌倉の海の素性を兼好に言ひ探されたる、いと口をし。鯉節となりては、木の端のやうにも思はれず、その梢とも見えすして、花の名をさへ世に散らしぬる。

鮫鱈の唐めきて子細らしきにつるし切りとはいふせくして、桀紂が料理めきたり。かれは本汁にえらまれ、鱈はかならず二の汁の大將にて、搦手をぞ承はりぬる。

もしは文字の理屈によらば、紫の上には鱒をめさせ給ひ、中宮の御膳にはことに鰒をや召させ給ひけん。

鮭は越路に名ありて、其國の雪にも似ず、色は入日の雲を染めて、うるはしく照りたるこそいみじけれ。たま〜鱒といふものも、その色は負けじとや挑むらんを。狭夜姫は石となり、山のいもは鰻となる。かれは有情の非常となり、これは非常の有情となれり。

その梢云々
頼政一深山木の
その梢も見え
さりし鱒は花に
あらはれにけり

紫の上云々
源氏物語の紫上
は春を好み中宮
は秋好中宮さて
秋を好めば也

石となりて世に益なく、鰻となりて調法多し。
 牡丹は花の一輪にて賞せられ、梅、櫻は千枝萬葩を束ねて愛せらる。それが勝れりとも劣れりとも、更に衆寡の論には及ばず。白魚といふものの世にもてはやさるゝは、かの鯛、鱸の大魚に比すれば、今いふ梅、櫻の類と等し。しかるに、國俗のとなへ異にして、しろ魚ともしろ魚ともいへり。是いづれならんといふに、さればしろ菊ともしろ鷺ともいはねば、しろ魚といふこそよからめといへばかたへの童のさし出でて、否とよ、世にしら猫ともしろ鼠ともいふにこそと打込まれて、爰に物定の博士暫く默然たり。
 鮎は鵜川の篝火に責められ、鯨は濁江の瓢箪におさへらる。比目魚は黒白に裏表をあらはし、海鼠は跡も先もなし。
 齒にもたまらぬ鱒の骨は、何の爲に持ちたるや、それも海月のなきには勝れるか。こゝに蛸の入道は、壺に入りてとらるゝこそ愚なれ。那智の瀧壺ならば、文覺が行力をも傳ふべきを、一休の口

一休の口云々
 一休蛸を好まれしこそ一休蛸に見えたり

はほめられながら、まさなの法師の身の果かな。
 かながしらといふ名のめでたくて、産屋の祝儀にはつかはれ侍る。さるを石持といふものの、銀持ともいはゞ、世に如何ばかりもてなさむを、益なき名をもちて口をしとや思ふらん。
 鱒細魚はをさなき心地ぞする。大男の髭口そらして食ふべきとも覺えず。
 鯨は、たゞ釣る比の面白きなり。里は砧に蚊屋しまひて、木曾に便よき人は、まだき新蕎麥喰ひたりなど、ほのめかされて、羨まじき比ならん。
 泥鰯は、酒の上に赤味噌ほどよく調じて、唐辛子くはへたるこそよけれ。白味噌がちなる大宮人は、いかに喰ふらんとさへ覺束なし。
 鰻とは先名のふつゝかなり。いかで無比の美味をそなへて、あやしき毒を持ちたりけむ。その味ひと毒の世にすぐれたれば、く

大宮人はいかにくふらん
 宗任「我國の梅の花は見つけども大宮人はいかにいふらん」

崑山のもさに云々
劉子新論「崑山
之下、以玉抵鳥、
彭蠡之濱、以魚
食犬」

臍、頌

ふ人を無分別ともいひ、くはぬ人を無分別ともいへり。
鯛といふものの味ひことに勝れたれども、崑山のもとに玉を磔
にするとか、多きが故に賤しまる。たとへ骸は田畠のこやしとな
るとも、頭は門を守りて天下の鬼を防ぐ。其の功鱈鯨も及ぶべか
らず。

されば歌人は鳥蟲に四季をわかつて、魚に四時の題詠はなし。
俳人かねて魚を品題とするは、もつばら味ひの賞翫を捨てざる故
なり。しかれば歌よみは、耳目の愛にとどまりて、食は野卑なりと
て取らざるに似たれど、かの喰ふべき若菜をもつばらによみて、菜
の花のうつくしきを歌の沙汰に及ばぬは、喰はれぬ故によまざる
にや、無下に口惜しと人の言ひたる、さがなき詞ながらをかしかり
けり。

臍、頌

也 有

三絨の警
周廟の金人の口
之に三絨して一古
銘ありし由、孔
子家語に見ゆ

渾沌王
莊子に、南海の
帝を儻といひ北
海の帝を忽とい
ひ、中央の帝を
渾沌といふ。渾
沌は耳目鼻舌
へてなき由見ゆ
只頼め
清水觀音の詠
一、只頼めしめぢ
が原のさしも草
われ世の中にあ
らん限は

臍を不用の物なりとは、我も誇りし人の數なり。されば他の一
寸は見えて、わが一尺は見えずとか。世に益なきものくらべせむ
には、まづ我こそは先なるべけれ。そもかの臍は物やは食ふ、素餐
の謗もなし。さらば物やはいふ、三絨の警にも及ばず。わが世に
ありて物を費すには似るべからず。人の支體に不用を論せば、男
の乳ばかりこそ、如何なる益のあるとも見えねど、今更これらを取
拂はば、腹は渾沌王の面影して、世にすぎなきものなるべし。いで
かの臍は頓死急症のせん方なきにも、まづとて是に灸する時は、泉
下の首途を留むるためしも多し。扱こそ腹のさしも草、只頼めと
もよみ給ひけめ。たとへ項羽が山を抜く力も、此の垢を取れば忽
ちに落つとぞ。痛悔臍をかむとは、漢文の古語にして、我が朝に人
を嘲りては、臍が笑ふともいへりけり。しかるにつまじき隠居あ
りて、臍金といふを溜められしより、天津空の鳴神も好もしがりて、
いかで是抓まむとし給ふより、女小童の氣づかふ事は、麝香の狩人

臍、頌

臍の緒に
芭蕉「古郷や臍
の緒に泣く年の
暮」

蓑蟲ノ説

を恐るゝにもこえたり。むかし祖翁の古郷にかへりて、臍の緒に泣く年の暮と、懷舊の袖をぬらさせしは、耳も及ばじ鼻も及ばず。かれはかく風雅にも大功あれば、今は我が身を何にたとへん。されば臍はわが下に立たむ事かたくとも、われも又臍の下といはんは、何とやらむ場所よからず。かれに倣はむとするに、天に二つの日なく、腹に二つの臍なきためし、しかれば上下の品定めはやめて、けふより只彼をそしるまじとぞ。

友とせむ臍物いはば秋の暮

(稿衣)

蓑蟲ノ説

素堂

みのむし〜、聲のおぼつかなきをあはれぶ。ちよよ〜とな
くは、孝に専らなるものか、いかに傳へて鬼の子なるらん。清女が
筆のさがなしや。よし鬼なりとも瞽叟を父として舜あり、汝は蟲
の舜ならんか。

みの蟲〜、聲のおぼつかなくて、かつ無能なるをあはれぶ。松
蟲は聲の美なるが爲に、籠中に花野をなき、桑子は絲を吐くにより、
からうじて賤の手に死す。みのむし〜、無能にして静なるをあ
はれぶ。胡蝶は花にいそがしく、蜂は蜜をいとむにより、往來お
だやかならず、誰が爲にこれをあまくするや。

みのむし〜、かたちの少しきなるを憐ぶ。わづかに一滴を得
れば、其身をうるほし、一葉を得れば、これがすみかとなれり。龍蛇
のいきほひあるも、おほくは人の爲に身をそこなふ。若かし汝が
すこしきなるには。

蓑蟲々々、漁父が一絲をたづさへたるに同じ。漁父は魚をわす
れず、風波にたへず、幾度かこれを解きて、酒にあてんとす。太公
すら文王を釣るの謗あり、子陵も漢王に一味の閑をさまたげらる。
みのむし〜、玉蟲ゆゑに袖ぬらしけん、田蓑の島の名にかくれ
すや。いけるもの誰か此の惑ひなからん。鳥は見て高くあがり、

蓑蟲ノ説

三七

子陵も云々
後漢の嚴光字は
子陵、光武帝の
舊友なり

玉蟲ゆゑに
臍の緒にあり
草紙の戀物語御伽
田蓑の島に
古今一雨に
田蓑の島に
ゆげば名をけふり
くれぬ物にぞあ
りける

遍照が蓑に云々
大和物語に見ゆ
櫻が塵に
定家「春雨のふ
りにし里を來て
見れば櫻の塵に
すがるみの蟲に
ふく風に
寂蓮「契りけん
親の心も知らず
みて秋風たのむ
みの蟲の聲」

嘲宵惑説

魚は見て深く入る。遍照が蓑をしぼりしも、ふるづまを猶わすれざる也。

蓑蟲々々、春は柳につきそめしより、櫻が塵にすがりて、定家の心を起し、秋は萩ふく風に音をそへて、寂蓮に感をすゝむ。木がらしの後は、空蟬に身をならふや、骸も躬も共にすつるや。
(風俗文選)

嘲宵惑説

毛 統

秋の暮のあはれを知らぬ人は、入麴をこのみ、長雪隠をする人は、唐様の書をすく。風雅のうつる、うつらざるの違ひなり。かの人生得燈を見ず、眠室にかきこもり、寝る事を樂みの最上とす。寢酒さめ、夢盡きて、ひたもの寝返れども、夜の明くるけしきもなく、屋普請の胸算用も仕あき、大國を領じ、治めんとおもへば、言下に治り、又は金持の浪人となりては、嗟峨の奥に引込み、斗撒頭陀に心を變じては、松島象鴻に身をよす。されど繪に書ける色に心を動かさし、獻立

古人の燭をさる
李白、春夜宴桃
李園序「秉燭而
夜遊」

紙にすわりたる心地せられて、やがて興盡きぬ。たまたま庚申の夜ありて、宵寢せぬ物とおどされ、大欠に懸金をはづし、田樂の焼くるを待ちかね、病人の夜伽に當つては、藥風爐に額を焦す。かゝる人たのしむといふ事をしらす、琴碁書畫は屏風の模様とおぼえ、花鳥風月は手本に書くとはかりしる。昔、宰予が晝寢も、夜ふかすあてに寐つらんかし。古人の燭をとるといへる、誠にゆるあり。人生七十今時はいきす。たとひ五十で死にたりとも、百年の算用にはたつべし。晝ありく鶴、鴻は、鷹につかまるれど、夜出づる情鷹は網にかゝりても、やがていなさるゝを、たふとしとおぼえたり。
(風俗文選)

長雪隠解

許 六

一藝の達人は、郷童に上座を許され、名字持ちたる人と、座席の争ひをする。早喰、早糞は男子の一藝とは稱じ侍る。此の藝おほく

長雪隠解

三九

早喰云々
跡

山
草木(臭き)がた
えねの隠語

鳴くや霜夜の
良經一きりざり
すなくや霜夜の
さむしるに衣片
敷きひさりかも
れん
朝市に云々
文選「大隱隱朝
市」

は無風雅の人にあり。たとひ一藝はつきたりとも、一藝一徳ありて、萬徳一藝にはかへがたからんか。されば甲斐の名將の分別所に定め、山といふ隠語を残し、森蘭丸がさざみ鞘かぞへたるは、信長公も藝者と見えたり。詩歌連俳の名句も、此の所より産出し、大悟十八度も、此の室に入て工夫を極めり。つくづく一とせのあはれを盡して、鳴くや霜夜の蜚薦の編目をもる月夜まで、人に心はつくめり。いにしへより朝市に隠家ありといへるは、儘に此の所の事なり。世務所用のいとまなき身も、しばらく閉關する時は、印纒を解きて、公役を許す。いそぎ閑居に入りて、跡を遠ざけ、半日の寂莫を樂まんと、尻をかゝげて走る。

何おもふ長雪隠のしふ團うちま

(風俗文選)

藪醫者、解

汝 村

世に藪醫者と號するは、もと名醫の稱にして、今いふ下手の上に

牛膝
ふのこづちさい
ふ薬草
鶴虱
ふのしりさいふ
薬草
道場の明をまつ
堂守坊主となり
了る也
木蘭色
黄赤紅の雜色

はあらず。いづれの御時にか、何がしの良醫、但州養父といふ所に隠れて、治療をほどこし、死を起し生に回すものすくなからず。されば其の風をしたひ、其の業を習ふ輩、津々浦々にはびこり、やぶとだにいへば、病家も信をまし、薬力も飛ぶがごとし。それより物替り星移つて、今は長助も長庵となり、勘大夫は勘益となる。當時の藪達を見るに、まづ門口に底抜の駕乗物をつるし、竹格子に賣薬の看板をかけて、文字の紺青も、半は兀げたり。たまさかの薬取を頼みて、薬店にはしらせ、物申は暖簾の内に答へて、女房の顔をつむむ。町役には牢舎を療じ、薬代にめでては、河原者にのます。牛膝には牛の膝を尋ね、鶴虱は鶴のしらみをさがす。薬のみも次第にかれて、胃の氣よわり、元氣衰へて、果は何がし村の道場の明をまつ。我が俳諧の道をもてこれを押せば、師説もいまだとほからざるに、其の手筋を失ひながら、宗匠めくをみるに、今はやらるゝ紗綾ちりめんの、乗物の中におぼつかなく、緋衣木蘭色のさとりはつすの拂子も、心許

なければ、佛法には薬毒の氣遣なければ、其の分なるべし。たゞ藪
醫者のやぶはらに、又出る竹の子も、藪とならんこそうるさけれ。

(風俗文選)

落柿舎ノ記

去 來

嵯峨にひとつのふる家侍る。そのほとりに柿の木四十本あり。
五とせ六とせ經ぬれど、このみも持ち來らず、代がゆるわざもきか
ねば、もし風雨に落されなば、王祥が志にも恥ぢよ、もし鳶鳥にとら
れなば、天の帝のめぐみにも漏れんと、屋敷もる人を、常はいどみの
のしりけり。ことし八月の末、かしこにいたりぬ。折ふしみやこ
より、商人の來り、立木に買ひ求めんと、一貫文さし出し悦びかへり
ぬ。予は猶そこにとまりけるに、ころころと屋根はしる音、ひし
ひしと庭につぶるゝ聲、よすがら落ちもやまず。明くれば商人の
見舞ひ來り、梢つくぐと打詠め、我むかふ髪の頃より、白髮生ふる

王祥が志云々
晉書、王祥傳、
「有丹奈結實、母
命守之、每風雨
祥輒抱樹而泣」

むかふ髪
前髪

まで、此の事を業とし侍れど、かくばかり落ちぬる柿を見ず。きの
ふの價、かへしくれたびてんやとわぶ。いと便なければゆるしや
りぬ。此者のかへりに、友どちの許へ消息送るとて、みづから落柿
舎の去來と書きはじめけり。

柿ぬしや木すゑはちかきあらし山

(風俗文選)

幻住菴ノ記

芭 蕉

石山の奥、岩間のうしろに山あり、國分山と云ふ、そのかみ國分寺
の名を傳ふなるべし。麓に細き流を渡りて、翠微に登る事、三曲二
百歩にして、八幡宮たゞせ給ふ。神體は彌陀の尊像とかや、唯一の
家には甚だ忌むなる事を、兩部光をやはらげ、利益の塵を同じうし
給ふも又たふとし。日比は人の詣でざりければ、いとゞ神さび、物
靜なる傍に、住み捨てし草の戸あり。よもぎ根笹軒をかこみ、やね
もり壁落ちて、狐狸ふしとを得たり。幻住菴と云ふ。あるじの僧

翠微
山の中腹
唯一の家
唯一神道

やがて出でじと云
 西行一吉野山や
 がて出でじと思
 ぶ身を花ちりな
 げと人玉集一誰
 かん一拾玉集一誰
 か知る憂世をす
 て、柴の戸にや
 ぶ身ぞさばし
 魂、吳楚東南云々
 杜甫一昔聞洞庭
 水今上岳陽樓
 吳楚東南拆一乾
 坤日夜浮

何がしは、勇士菅沼氏曲翠子の伯父になん侍りしを、今は八年ばかり昔になりて、正に幻住老人の名をのみ残せり。予又市中をさること十年ばかりにして、五十年やちかき身は、養蟲のみのを失ひ、蝸牛の家を離れて、奥羽象潟の暑き日に面をこがし、高すなごあゆみくるしき北海の荒磯にきびすを破りて、今歳湖水の波にたゞよひ、にはほの浮巢のながれとゞまるべき蘆の一本の陰たのもしく、軒端ふきあらため、垣根結ひそへなどして、卯月のはじめ、いとかり初に入りし山の、やがて出でじとさへ思ひそみぬ。さすが春の名残も遠からず、つゝし咲き残り、山藤松にかゝつて、時鳥しばし過ぐるほど、宿かし鳥の便さへあるを、木つゝきのつゝくともいとはじなど、そゞるに興じて、魂、吳楚東南にはしり、身は瀟湘洞庭に立つ。山は未申にそばだち、人家よき程に隔り、南薰峯よりおろし、北風海を浸して涼し、日枝の山、比良の高根より、辛崎の松は霞こめて、城あり、橋あり、釣たるゝ船あり。笠取にかよふ木樵の聲、麓の小田に早

田上山
 猿丸大夫の故跡
 あり
 網代守
 萬葉に網代守の
 歌なし
 海雲に巢をいさな
 び
 山谷集一徐老海
 堂集上、王翁主
 薄峰庵一註に
 徐徐樂道隱於藥
 肆中、家有海雲
 數株、結巢其
 上、時與客飲其
 間、又王道入參
 禪、歸結屋於主
 薄峰上、嘗有毛
 人至其間問道
 辱顔に云々
 王子瑞一門前劉
 啄定佳客、齋外
 辱顔皆好山
 空山に風云々
 石林詩話、青
 山門風坐、黃鳥
 扶書眠
 加茂の甲斐何がし
 賀茂祠官藤木甲
 斐守敦直能書の
 名あり

苗とる歌、鶯飛びかふ夕闇の空に、水鶏のたゞく音、美景物として足らずといふ事なし。中にも三上山は、士峯の傍にかよひて、武藏野のふるきすみかもおもひいでられ、田上山に古人をかぞふ。さゝほが嶽、千丈が峯、袴腰といふ山あり。黒津の里はいとくろう茂りて、網代守るにぞとよみけん、萬葉集の姿なりけり。猶眺望くまなからんと、後の峯に這ひのぼり、松の棚つくり、藁の圓座を敷きて、猿の腰掛と名づけ、彼の海棠に巢をいとなび、主簿峯に庵を結べる王翁徐怪が徒にはあらず。唯睡辟山民となりて、辱顔に足をなげ出し、空山に虱を捫つて坐す。たまゝ心まめなる時は、谷の清水を汲みて自ら炊ぐ、とくゝの雫をわびて、一爐の備いとかるし。はたむかし住みけん人の、殊に心高く住みなし侍りて、たくみおける物すきもなし。持佛一間を隔て、夜の物をさむべき處など、いさゝかしつらへり。さるを筑紫高良山の僧正は、加茂の甲斐何がしが嚴子にて、此のたび洛にのぼりいまそかりけるを、ある人をして

額を乞ふ。いとやすくと筆を染めて、幻住庵の三字を送らる。頓て草庵の記念となしぬ。すべて山居といひ、旅寝といひ、さる器たくはふべくもなし。木曾の檜笠、越の菅蓑ばかり、枕の上の柱に懸けたり。晝はまれくとぶらふ人々に心を動し、あるは宮守の翁、里のをのこ共入り來りて、かのしゝの稻くひあらし、兔の豆畑にかよふなど、我が聞きしらぬ農談、日既に山の端にかゝれば、夜座靜に月を待ちては影を伴ひ、燈を取りては、岡兩に是非をこらす。かくいへばとてひたぶるに閑寂を好み、山野に跡をかくさんとはあらず。やゝ病身人に倦んで、世を厭ひし人に似たり。つらく年月の移りこし、拙き身の科をおもふに、ある時は仕官懸命の地をうらやみ、一たびは佛籬祖室の扉に入らんとせしも、たよりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞じて、しばらく生涯の計とさへなれば、終に無能無才にして、此の一筋につながる。樂天は五臟の神をやぶり、老杜は瘦せたり、賢愚文質のひとしからざるも、いづれか幻の

農談
古文前集、朱晦菴、野人載酒來、農談日已夕、岡兩に是非をこらす
莊子、齊物論、一
行、今子止、曇子
子坐、今子起、曇
何其無特操與、
佛籬祖室
惠能禪師偈「吾
三十而窺佛籬祖
室」

栖ならずやと、おもひ捨てゝふしぬ。

まづたのむ椎の木もあり夏木立

(風俗文選)

十八樓記

芭蕉

賀島氏
賀島落梧

まづたのむ
源氏惟本「たち
よらん陸頼み
し椎がもさ空し
き床さなりにけ
るかも」

美濃の國長良川にのぞみて水樓あり。あるじを賀島氏といふ。稻葉山後に高く、亂山左右にかさなりて、ちかからず遠からず、田中の寺は、杉の一むらにかくれて、岸にそふ民家は竹のかこみのみどりも深し。曝布所々に引きはへて、右に渡し船浮ぶ。里人行きかひしげく、漁村軒をならべて、網をひき釣をたるゝおのがさまも、たゞ此の樓をもてなすに似たり。暮れがたき夏の日も忘るばかり、入日の影も月にかはりて、波にむすぼるゝかゞり火の影もやゝちかく、高欄のもとに鶉飼するなど、誠にめざましき見ものなりけらし。かの瀟湘の八つのながめ、西湖の十の境も、涼風一味のうちにおもひためたり。もし此の樓に名をいはんとならば、十八樓

ともいはまほしきなり。
此のあたり目に見ゆるもの皆涼し

(風俗文選)

芭蕉堂再興記

蕪村

四明山
比叡山の異名

四明山下の西南、一乗寺村に禪房あり。金福寺といふ。土人口稱して芭蕉庵と呼ぶ。階前より翠微に入ること二十步、一塊の丘あり。すなはち芭蕉庵の遺蹟なりとぞ。もとより閑寂玄隱の地にして、綠苔や、百年の人跡をうづむといへども、幽篁なほ一爐の茶煙をふくむが如し。水行き雲停り樹老い鳥睡りて、頻りに懐古の情に堪へず。やうやく長安名利の境を離るといへども、ひたぶるに俗塵をいとふとしもあらず。鶏犬の聲籬を隔て、樵牧の路門をめぐれり。豆腐賣る小家も近く、酒を沽ふ肆も遠きにあらず。されば詩人吟客の相往來して、半日の閑を貪るたよりもよく、飢をふせぐまうけも自在なるべし。抑いつの頃より、さは唱へ來りけ

清瀧の浪
芭蕉一清瀧や浪
にちりこむ青松
葉一
嵐山の雲
同「六月や峰に
雲おくあらし
山」
夏衣
同「風薫る羽織
は襦もつくろは
ず」
長嘯の古墳
同「長嘯の墓も
めぐるか鉢叩」
薦を着て
同「薦を着て誰
人います花の
春」
きのふや鶴を
同「梅白し昨日
や鶴をぬすまれ
し」
孤山の風流
林和清が孤山の
隠棲に二鶴を飼
ひし故事

るにや、草かる童麥打つ女にも、芭蕉庵を問へば、必ずかしこを指す。むべ古き名なりけらし。さるを人其の故をしらす。竊に聞く、いにしへ鐵舟といへる大徳、この寺に住みたまひけるが、別に一室を此のところに構へ、手自ら雪炊の貧をたのしみ、客を謝して深くかきこもりおはしけるが、蕉翁の句を聞いては、泪うちこぼしつゝ、あなたふと忘機逃禪の郷を得たりとて、常に口ずさみ給ひけるとぞ。其の比や蕉翁山城の東西に吟行して、清瀧の浪に眼裏の塵を洗ひ、嵐山の雲に代謝の時を感じ、或は丈山の夏衣に、薰風萬里の快哉を賦し、長嘯の古墳に、寒夜獨行の鉢叩を憐み、あるは薦を着て誰人いまずとうちうめかれしより、昨日や鶴を盗まれしと、孤山の風流を奪ひ、大日枝の麓に杖を曳いては、麻のたもとに曉天の霞をはらひ、白河の山越して、湖水一望のうちに、杜甫が昔を決き、つひに唐崎の松の靡々たるに、一世の妙境を極め給ひけん。されば都經廻のたよりよければとて、折々此の岩阿に憩ひけるにや。さるを枯野の

辛崎の松
同「辛崎の松は
花よりおぼろに
て」
枯野の夢
同「旅に病んで
夢は枯野を掛け
めぐる」
雨をよるこび
蘇東坡に喜雨亭
記あり

夢のあとなくなり給ひしのち、かの大徳ふかくなげきて、すなはち
草堂を芭蕉庵と號け、なほ翁の風韻をしたひ、遺忘にそなへたまひ
けるなるべし。雨をよるこびて亭に名つくるなど、異くににも、さ
るためしは多かるぞ。しかはあれど、此の處にて蕉翁の口號な
りと世に聞ゆるもあらず。ましてかい給へるものの筆のかたみ
だになければ、いちじるしく争ひはつべくも覺えね。住侶松宗師
の曰く、さりや、うき我をさびしがらせよと、わび申されたる閑古鳥
のおぼつかなきは、此の山寺に入りおはしてのすさみなるよし、此
の頃まで世にありし耆老の、ふみのみちにも心かしこきが物がた
りし侍りし。されば露霜のきえやらぬ墨の色めでたく、年月流れ
去り、水くきの跡などかのこらざるべき。さるを無功德の宗風こ
ゝろ猛く、不立文字の見解まなきならめき、佛經聖典も捨てて長物
とす。いかでさばかりのもの貯へ藏すべきなど、いと騒々しき
狂漢のために、いたづらに塵壺の底にくち、等閑に紙魚のやとりと

自在庵の道立
樋口源左衛門、
伊藤坦庵の曾孫

ほろびにけん。びんなきわざなりなど、悲み聞ゆ。よしやさは追
ふべくもあらず。唯かかる勝地にかゝる尊き名の残りたるを、あ
いなく打捨ておかん事、罪さへおそろしく侍れば、やがて同志の人
々をかたらひ、かくの如くの一草屋を再興して、ほととぎす待つ卯
月のはじめ、をじかなく長月の末、必ず此の寺に會して、翁の高風を
仰ぐこととはなりぬ。再興發起の魁首は自在庵の道立子なり。
道立子の大祖父坦庵先生は蕉翁のもろこしのふみ學びたまひけ
る師にておはしけるとぞ。されば道立子いま此の擧にあづかり
給ふも、大かたならぬすく世のちぎりなりかし。
(蕪村文集)

鹿島紀行

芭蕉

洛の貞室、須磨の浦の月見に行きて、松かげや月は三五夜中納言
といひけん、狂夫のむかしもなつかしきまゝに、此の秋、鹿島の月見
んと、おもひ立つ事あり。伴なふ人ふたり、ひとりは浪客の士、ひと

此の秋
貞享四年八月

水雲の僧
宗波

無門の關も云々
宋僧、慧開に無
門關の著あり、
頌曰、大道無門、
千差有路、獨步
乾坤

秦句の一千里云々
朗詠「秦句之一
千餘里、凍々水
宮、澄々粉飾」

爲仲が長櫃云々
無名抄に橋爲仲
陸奥の守の任は
十二合に萩を長櫃
れてもち上れり
と見ゆ

夜の宿醒し
白樂天「朝食肌
濕、髮杯盤、夜宿
腥臊汚牀席」
さきの和尚
佛頂禪師

深省を發す
杜甫「欲覺聞晨
鐘、令人發深省」

鹿島紀行

りは水雲の僧僧はからすの如くなる墨の衣に、三衣の袋をえりに
打掛け、出山の尊像を、厨子にあがめ入れて、背中にせおふ。柱杖曳
きならしめて、無門の關もさはるものなく、あめつちに獨歩して出で
ぬ。今ひとり、僧にもあらず、鳥鼠の間に名をかうぶりの、鳥なき
島にも渡りぬべくて、門より船に乗りて、行徳といふ所に至る。船
をあがれば、馬にももらす、細脛のちからためさんと、歩行よりぞ行
く。甲斐國よりある人の得させたる檜木もて造れる笠を、おのお
のいたゞきよそひて、やはたといふ里をすぐれば、かまがいの原と
いふ廣き野あり。秦句の一千里とかや、目もはるかに見わたさる
。つくば山むかふに高く、二峯ならび立てり。かの唐土に雙劍
の峯ありと聞えしは、廬山の一隅なり。雪は申さずまづ紫のつく
ばかなとは、我門人嵐雪が句なり。すべて此山は、日本武尊の言葉
をつたへて、連歌する人の、はじめにも名づけたり。和歌なくはあ
るべからず、句なくは過ぐべからず、誠に愛すべき山の姿なりけら

し。萩は錦を地に敷けらんやうにて、爲仲が長櫃に折り入れて、都
の土産に持せたるも、風流にくからず。さちかうをみなへし、かる
かや、尾花みだれ合ひて小男鹿のつま戀ふ聲いとあはれなり。野
の駒所得がほにむれありく、又あはれ也。日すでに暮れかゝる程
に、利根川のほとり、布佐といふ所につく。此の川にて、鮭の網代と
いふものをたくみて、武江の市にひさぐ者あり。宵の程、その漁家
に入りてやすらふ。夜の宿醒し。月くまなく晴れけるまゝに、夜
船さしくだして鹿島に至る。晝より雨しきりに降りて、見らるべ
くもあらず。麓に根本寺のさきの和尚、いまは世をのがれて、此の
所におはしけるといふを聞きて、尋ね入りてふしぬ。すこぶる人
をして、深省を發せしむと吟じけん。しばらく清淨の心を得るに
似たり。曉の空いささか晴れぬるを、和尚おどろかし給ふれば、人
々おどろき出ぬ。月の光、雨の音、たゞあはれなるけしきのみ、むね
に満ちて、いふべき言の葉もなし。はる／＼と月見に來たるかひ

鹿島紀行

荷擔の人
清少納言をさす

なきこそ本意なきわざなれど、かの何がしの女すら、時鳥の歌、えよ
までかへりわづらひしも、我ためにはよき荷擔の人ならんかし。

月はやし梢は雨を持ちながら

翁

雨に寐て竹おきかへる月見哉

曾良

(風俗文選)

宇治行

蕪村

ひらたけの云々
宇治拾遺物語に
不浄説法する法
師は平茸に生る
さあり

宇治山の南、田原の里の山深く、茸狩し侍りけるに、若きとちは、え
ものを貪り先を争ひ、余ははるかに後れて、こゝろ静かにくまぐ
さがしもとめけるに、菅の小笠ばかりなる松茸五本を得たり。あ
なめざまし、いかに宇治大納言隆國の卿は、ひらたけのあやしきさ
たはかいとめ給ひて、など松茸のめでたきことは、もらし給ひける
にや。

君見よや拾遺の茸の露五本

最高頂上に人家見えて高尾村といふ。汲鮎を業として世わたる

たよりとなす由。茅屋雲に架し斷橋水に臨む。かゝる絶地にも
すむ人有りやと、そゞろに客魂を冷やす。

鮎落ちていよ／＼高き尾上かな

米かしといへるは、宇治河第一の急灘にして、水石相戦ひ、奔波激浪
雪の飛ぶが如く、雲のめぐるに似たり。聲山谷に響いて人語を亂
る。銀瓶乍破水漿迸、鐵騎突出刀鎗鳴、四絃一聲如裂帛と、白居易が
琵琶の妙音を比喻せる絶唱をおもひ出でて

帛を裂く琵琶の流や秋の聲

(蕪村文集)

遠千鳥序

鬼貫

時は逢ひがたく失ひやすし。茲に來山といひし人、俳道に其の
名高く、世もて其の風をしたはすといふことなし。予若かりし頃
より、したしく相かたらひ侍りける。昔、螢雪の窓を敲いて、鶯には
あらねど、小鍋やほしきと、手づから恵み來りし。其の名を小西と

遠千鳥序

四五

銀瓶乍破水漿迸
白樂天、琵琶行
にある詞句

小鍋やほしき

清輔、袋草子「驚
よなどさば啼く
ぞちやほしき小
鍋やほしき母や
戀しき」
句
鬼貫「文も見ぬ
しぐれふる夜ぞ
定めなき」

青白の眼
晋の阮籍、わが
好める人にて青
眼をなし、嫌へ
る人には白眼を
以て對したりと
の故事

陳后山
陳師道は宋の高
士なり、后山と
號す、詩文を以
て稱せらる

柳後園
渡沙吾仲、支考
門なり、京六條
に卜居す

日あらず
日をえらばずの
意
大小の額云々
月の大小に従ひ
かけかふるより
いふ
爵は金谷の云々
李白「如詩不成、
野依金谷酒斗
數」

遠千鳥序

呼びていまそかり、鍋の命はつきなかりしを、去年の時雨月の初、定
めなき數に入りぬ。其の頃句に悼みてつかうまつりし。我が袖
のきはづきも變らざるに、早一回りのけふに向ふ。

むかしおもふしぐれ降る夜の鍋の音

生前の風流は木の葉駒にくはしく載すれば、更にもいはじ。彼の
翁天性酒を愛すと雖ども、終に親疎青白の眼をわかたず。しばし
ば沈酔の中にも俳諧を諷ふ事、恐らくは一斗百篇の詩を取ちすと
いふべし。世の人十萬堂と稱美せり。其の美をしたひ其の徳を
あふぐ食客門人筆をして盡しがたし。それが中に烏路齋文十、ひ
とり節を守り志の高き事、彼の陳后山も麓なるべし。よて遠千鳥
を編して、いさゝか師恩を酬いんとす。これが序を乞ふにいなみ
がたく、享保かとの酉、初冬の日、槿花翁おにつら筆をとるものな
らし。

(なぐるま)

宴柳後園序

支考

世にあそぶ人ありて、綾羅錦繡にたのしむ時は、樂つきて後たの
しむものなし、山林樹下にあそぶものは、心にみたざれば、世にうら
やむかたも出きぬべし。此のふたつのさかひに居らざるものを、
心に天遊ありとぞ、むかしの人もいへりける。されば柳後園の何
がし、三四の友達ありて、遊ぶ事日あらず。額には閑の一字を題し
て、しづかならぬ時は横になし、やかましき時はさかさまに置きて、
其時の心に隨ひ行くは、大小の額見る心にや侍りけん。此の日東
花坊も此の中にあそびて、人々酒のまんと催したるに、心に物をと
め、口に餘情をいふ人ならば、罰は金谷の酒もをしからん。俳諧に
案じ入りたる時は、こよるといふものして、くさめさせむとぞたは
ぶれける。

(風俗文選)

銀河序

芭蕉

北陸道に行脚して、越後國出雲崎といふ所に泊る。彼の佐渡が島は、海の面十八里、滄波を隔て、東西三十五里によこをりふしたり。峰の峻難、谷の隅々まで、さすがに手にとるばかり、あざやかに見わたさる。むべ此島はこがねおほく出て、あまねく世の寶となれば、限りなき目出度島にて侍るを、大罪朝敵のたぐひ、遠流せらるゝによりて、たゞおそろしき名の聞えあるも、本意なき事におもひて、窓押開きて、暫時の旅愁をいたはらんとするほど、日既に海に沈んで、月ほのぐらく、銀河半天にかゝりて、星きら／＼と冴えたるに、沖のかたより、波の音しば／＼はこびて、たましひけづるがごとく、腸ちぎれて、そゞろにかなしびきたれば、草の枕も定らず、墨の袂なにゆゑとはなくて、しぼるばかりになん侍る。

あら海や佐渡に横たふあまの川

(風俗文選)

未摘花のわろ口
 一はなつかしき色
 さはなにしに何に
 此未摘花を袖に
 ふれむの源氏に
 常陸宮の姫君か
 の鼻の赤きを歌
 こちてよめるか

時しらぬ山
 伊勢物語「時し
 らぬ山は富士の
 根いつさてか鹿
 子まだらに雪の
 ふるらむ」
 視聽言動の四
 論語「顔淵「非
 禮勿視、非禮勿
 聽、非禮勿言、非
 禮勿動」

鼻箴

也 有

しのぶの浦の見る目はもとより、耳とも口ともつゞけたらむ、歌にもさのみけやけからず。如何なれば鼻といふ名の、ひとへに俳諧にはとゞまりぬらむ。未摘花のわろ口も、あからさまには詠みなし給はず、そのをかしみこそ俳諧には嬉しけれ。さりとして臍の尻のとて、いやしむ類の物にもあらず。そも猿田彦の御鼻は、神代一番の見事さにて、愛宕、高雄の天狗達も、自慢は鼻にあらはれながら、杉の木の間に露霜のおきどころなくて、いかに寒からむ。見よや、人の老いゆけば、目は遠山の霞棚引き耳には鳥蟲の聲もうとく、口は冬がれの齒も落ちて、盛衰まのあたり悲みを催す。たとへ百年のつくも髪だに、鼻ばかりはかけもやらず、つぶれて用をかく事もなし。ひとり常磐の操を守りて、時しらぬ山とも稱すべけむ。されば恐るべき人心、むかし聖賢のをしへにも、視聽言動の四つば

鼻箴

四九

かりをあげて、鼻に警のゆるかせなるより、世に傲のきざし起りて、
 寵にほこる妾小姓の、おほくは主を鼻にかけて、心にあはぬ傍輩を
 も鼻にあしらふ高ぶりより、得手に鼻つくあやまちも仕出でぬる。
 えならぬかをりに引かれよる、色のいましめは尙更にして、女のよ
 れる髮筋には、鼻の高き大象もつながれ、あほうの延ばせる鼻毛に
 は蜻蛉こひづるもつらるゝ例、わざはひ蕭牆より起るときけば、つゝしむべ
 きは鼻のさきなるべし。

(編衣)

嵐蘭誄

芭蕉

金革を擽にして、あへてたゆまざるは士の志也、文質偏ならざる
 をもて、君子のいさをしとす。松倉嵐蘭は、義を骨にして實を腸に
 し、老莊を魂にかけて、風雅を肺肝の間にあそばしむ。予とちなむ
 事、十とせあまり九とせにや。此三とせばかり、官を辭して岩洞に
 先賢の跡をしたふといへども、老母を荷なひ、稚子をほだしとして、

わざはひ云々
 論語、季氏「吾恐
 季孫之憂、不在
 簞食之内也」
 蕭牆、在蕭牆
 之内也

金革を擽にし
 中庸「衽金革、
 死而不厭、北方
 之強也」
 文質偏ならず
 論語、雍也「質
 勝文則野、文勝
 質則史、文質彬
 々然、後君子」

いまだ世波にただよふ。されども榮辱の間に居らず、日々風雲に
 坐して、今年仲の秋中の三日、由井、金澤の波の枕に月をそふとて、鎌
 倉に杖を曳き其の歸るさより、心地なやましようして、終に息絶えぬ。
 同じき二十七日の夜の事にや、七十年の母に先だち、七歳の稚子に
 おもひを残す。いまだ惜むべき齡の五十にだにたらず、公の爲に
 は、腹おしきりても悔ゆまじきうつはもの、はかなき秋風に吹き
 しをれたる草の袂、いかに露けくも、口をしくもあるべき。今はの
 時の心さへ知られて悲しきに、老母の恨、はらからのなげき、親しき
 かぎりには聞き傳へて、偏に親族の別にひとし。過ぎつる睦月ばか
 りに、稚子が手をとりにて予が草庵に來り、かれに號得さすべきよし
 を乞ふ。王戎五歳の眼ざしうるはしと、戎の一字を摘んで、嵐戎と
 名づく。其よろこべる色、今日のあたりを去らず。いける時むつ
 まじからぬをだに、なくてぞ人はしのばるる習ひ、まして父のごと
 く、子のごとく、手の如く、足の如く、年頃いひむつびたる係の、愁の袂

王戎五歳の眼ざし
 晋書、王戎傳に
 裴楷、王戎の目を
 見て戎眼爛々如
 廢下電さいへり

にむすばほれて、枕も浮きぬべきばかり也。筆をとりておもひをのべんとすれば才つたなく、いはんとすれば胸ふたがりてたゞおしまづきにかゝりて、夕の雲にむかふのみ。

秋風に折れてかなしき桑の杖

(風俗文選)

俳諧發願文

浪化

六道
天上、人間、餓鬼、畜生、修羅、地獄

曾根の松
播州印南郡曾根村の名松
清見寺の梅
駿州清見寺の臥龍梅

人死して六道に生れ、からき目見んは、ひとへに娑婆の業因によりけるとかや。世に立花すく人は、たてゝは崩しくづして又たて終日大汗ながし、霞のさきに枇杷の葉つけて、馬の耳のおもひをなし、屈曲を好みて、鐵釘に打ちつけ、針がねにしばらくかがめて、見る目も苦しかるべし。わづか五寸の瓶に、千山萬水の思ひをこめんも、猶々氣づまりならんかし。もし立花せんとならば、曾根の松を心に立てて、ながしに清見寺の梅ならば、少しは心のびやかなる風情も有るべし。されど一時の榮花も盡きて、まづ椿ころりと落ちて、

狂言綺語
白樂天「願以今生世俗文字之業、狂言綺語之誤、讚佛乘之因、轉法輪之緣」

無常をしめし、木槿一日の榮をさととりて、程なくしをる。例の心短きにや、やがてぬき捨て、果は烟と立ち登る。それさへあるを、碁うつ人は赤目引きつり、喰物時をわすれ、終夜同じ事並べたらんは、飽かずやあらん。よき手あしき手とて、一座打ちこぞり、案じふくれ、碁石の限り蒔き盡す時、何のをし氣もなく打崩したるは、さりとは残多き事なるべし。さしも手間入れて案じたらんは、せめて五日十日もながめよかし。此人死たらん後は必ず賽の河原に生れて、父母戀しがる子供に立ちまじはり、地藏おぼさつの御衣の下にかくれ、あけくれ同じ事すらんも、又あはれなるべし。もし一枝さして諸佛に奉り、一目投げてはあみだぶ唱へたらん人は、うたがひなく西方に生れて、百味の外の飯食には、奈良茶、蕎麥切はくひ次第たるべし。今吾はいかいの結縁は、狂言綺語のふるみにおとし、百韻千句の數を合せて、一座の廻向は、あみだぶくと申して仕舞ひ侍りける。

公平傳

汝村

坂田公平きんぺいは、何いづれの處の人といふ事を知らず。源頼義朝臣に仕へて、公時きよときが男山姥おやまが孫とはいひ傳ふ。年のほど三十あまりにして、終に衰老の容かたちなし。其生質うまれつき正直正路にして、人の異見を聞かず、一生彼が妻といふものの沙汰なし。其高名をいはず、夷あまが千島の末々まで、知らざる人もなく、慥に見たる者もなし。たゞ好む物には茶筌ちか髪かみに鐵棒てつぼうにて、其勇力ゆうりきのつよき事は、恰も木綿織物の名目にさへなりにける。かゝる兵つはものも、すこし艶だちたる所のあるや、公平女とはいへども、いまだ男子の號には蒙あづからせず。治世榮花の程を見んと思はゞ、和泉大夫が芝居に走りて、寺上りのわらんべ、又はつよみを好む中小姓の、感に堪へたる顔つきを見るべし。つらく無常迅速の哀をしるや、いづくの隱元禪師にはだまされけん、こそとすりて、公平道心とはこゝをいふ。剛き物先づほろぶためし、死ぬ

寺上り
寺小屋を終へし
兒童

黄泉に云々
淨瑠璃に「公平
地獄めぐり」あり

べき場所をこしらへ、終に黄泉に旅立たせて、地獄破りの沙汰まではありて、其後は便りをせず。彼公平が手柄のほど、上下萬民おしなべて、感せぬものこそなかりけれ。

物忘翁傳

也 有

わすれ草生ふる住吉のあたりに、住みわびたる物忘の翁あり。さるは健忘などいへる病の筋にはあらで、只身のおろかに生れつきて、物覚えの疎かなるにぞありける。昔は經學の道をも問ひ聞き、作文和歌の席などにも、誘ふ人あれば交らひけれど、さく事習ふ事のさすがに面白しと思ふ物から、夕べに覺えしこと、朝ぼらけには漕ぎ行く舟の跡なくて、身にも心にもこの事すくなし。さればこれを書付け置かむとしひて硯すずりならし机によれば、春の日は蝶鳥に心浮かれて過ぎ、秋の夜は虫なきていとねぶたし。かくてぞ老曾の森の草、かりそめの人の約束も、小指を結び手のひらに

漕ぎ行く舟の
端はな沙さ一いつ世よの
中なかを何なにに譬たとへむの
朝あ開ひき漕こぎななき
し舟ふねの跡あとななき
ごごささし

物忘翁傳

行く水の數
伊勢物語「行く
水に數かくより
もはかなきは思
りぬ人を思ふな
りけり」

何がし僧正
金葉集、永縁僧
正「きく度に珍
らしければ時鳥
地こそすれ」

むかし炎天に云々
那隆日中戸外に
仰臥して我は書
を曝す也といひ

しるしても、行く水の數かくはかなさ、人もわらひて罪ゆるしつべし。されば翁のいへりける、身のとり所なきを思ふに、若きに數々へられしほどは、人やりならず恥かしかりしが、つんぼうの雷にさわがず、座頭の蛇におどろかざるこぼれ幸なきにもあらず、世のつね聞きわたる茶のみがたりも、はじめ聞ける事の耳にのこらねば、世に板がへしといふ咄ありて、またかの例の大阪陣かと、若き人々はつきじろひて小便にも立つが中にも、我は何がし僧正の時鳥ならねど、きく度にめづらしければ、げにと聞くかひある翁かなと、語る人は心ゆきても思ふべし。ましてつね々々手馴れ古せし文章物語の双紙も、去年見しことはことし覺えず、春よみし書は秋たどくしく、又もくりかへし見る時は、只新なる文にむかふ心地して、あかず幾度も面白ければ、わづかに兩三帙の書籍ありて、心の樂更に盡くる事なし。むかし炎天に腹をさらしたる男は、人にも折々物を問はれてとりまがはじ言ひたがへじと、いかにかしましき心

し事、世説に見ゆ

わすれては
新古今集「忘れ
てはうちなげか
る夕かな我がの
み知りてすぐる
月日を」

かしけん。今は中々うれしき物わすれかなとぞ言ひける。猶かの翁が家の集に、何の本歌をか取けるならむ。
わすれてはうちなげかる、夕べかなと
物覚えよき人はよみしか
(編表)

妖物傳

也 有

世に妖物といふ物ありて、おほくは女となり兒とあらはれ、大坊主の取沙汰はきけど、月代そりたるはつひに聞かず。夜ばかり出づるはいかなるゆるぞと、或人の問ひたるに、晝は例の子供のたかりて煩はしさと答へたるぞ、さしあたりての名言なるべき。臆病者を相手にとれば、その藝ことに出來榮して、武功の人に出あはすれば、思ひの外のあやまちをかうむる。鬼は伯母に化けて腕をとりかへし、狐は叔父にばけて畏の異見をいふ。誠に鬼が伯藏主になり、狐が伯母に化けたらんは、その姿をかしからじ。これらや

狐が伯母に
狂言「こんくわ
い」

正風自然の本姿なるべきをや。まづは狐狸のなすわざに落ちて、猫また河童はたま〜の沙汰なれども、その正體の穿鑿は、樂屋の見えておもしろからず。たゞ理屈なき妖物といふものこそ、ことにゆかしけれ。そも〜神は湯立ゆだてにもうつらせ給ひ、佛は稱名に來迎なるを、此の妖物は百物語に感應して、何とさだまれる姿なければ、三才圖會にも載せられず、訓蒙圖彙の筆にも及ばず、たゞ赤表紙の小双紙にはづかしき姿はとゞめられける。さるに昔今の美婦國色すら、身の終はみぐるしく、關寺におちぶれ、檜垣にさまよひ、又は猿澤の池の藻屑にまとはれ、馬嵬が原の草葉にさらされて、果は東坡が九相の見たてもうるさきに、たゞこの物の終ばかり引幕ひきまくらの陰をもたのます、あとに箒も雑巾もいらす、かきけすやうに失せにけるこそ、いふばかりなくめでたけれ。

(獨衣)

手足、辯

汝村

檜垣
白河の遊女、筑紫
撰集の作家、後

甲冑のよろひかぶとをあやまり、行燈挑灯をとりちがへたるは、むかしより國中みな誤り覺えければ、却つてあらためたる人を、あやまりといふも理ことわりならん。こゝに一身の中、足を賤しとし、手を貴しと定め置きたるは、いづれか賤しとし、いづれかたふとしとせんや。賤しとして終に斬り捨てたる人もきかざれば、持にこそ定め置きたけれ。それ足は行歩を産として、外の用をしらす。沓、木履をかけ、草履わらちをはきて直に土をふまず、居る時は、足袋したうらに包みまはし、歩みつかるれば馬、駕籠に扶け乗せられ、千山萬水の間に坐して風情に嘯く。手は一身の奴にして、定めたる産なし。頭の虱を捫り、跟くびのあかぎれを撫づる、至らざる所なく、又なさすと云ふ事なし。是いやしき事の第一なるべし。貴人高家の傍に、侍女小姓のつとめあれど、厠の役ある事を聞かず。されば我が脚にて、他の鼻端の塵を拂はば、人怒つて我を罪せん。人また我が頭の蠅を、足にて追はゞ、我是をたふとしとおもへど、世の人我に代つて、にくみ

のゝしり、怒をうつして、我を阿方と號するこそ、おほきなる僭上なれ。其の僭上人、蒲團たかむしろに臥して休する時、必ず足を伸すを一番とす。湯に入る人も、足からならでは這入りがたし。向後足にあたらしみを付けて、手を古風のふるみにおとさん。但し徳利子、各別の沙汰なるべし。

(風俗文選)

葛の翁の贊

蕪村

張九齡 宿昔青雲志、蹉跎白髮年、誰知明鏡裏、形影自相憐
丈山は云々 丈山は云々 丈山は云々 丈山は云々
龍山公云々 龍山公云々 龍山公云々 龍山公云々
近衛龍山公一宗 近衛龍山公一宗 近衛龍山公一宗 近衛龍山公一宗
鑑が姿を見よ 鑑が姿を見よ 鑑が姿を見よ 鑑が姿を見よ
たかきつばたに 三條 三條 三條 三條
實隆一説に 三條 三條 三條 三條
きつばたに見れば 三條 三條 三條 三條
り 三條 三條 三條 三條
生前一盃葛の水 生前一盃葛の水 生前一盃葛の水 生前一盃葛の水
白樂天一身後堆 白樂天一身後堆 白樂天一身後堆 白樂天一身後堆
金柱北斗不如此 金柱北斗不如此 金柱北斗不如此 金柱北斗不如此
生前一樽酒 生前一樽酒 生前一樽酒 生前一樽酒

張九齡は明鏡の裏に白髪を憐み、丈山は清き流に老の面影を恥づ。こゝにひとり、の隠士あり。いづれのところの人といふことをしらす、常に葛てふものをたしめば、人呼んで葛の翁といふ。もとより青雲權貴の地をいとひて、龍山公の御前に侍らざれば、おのづからかきつばたの秀句を道れ、資朝の卿に逢ひ奉らざれば、むく犬のそしりもなし。只生前一杯の葛水、身後の榮聲にかへなまし。されば清濁明晦のさかひ、是不是いづれぞや。しかじ清からんよ

資朝 日野資朝の故事 徒然草に見ゆ

りは寧ろ濁らんには、明かならんよりは、はた、晦からんには、

葛水や鏡に息のかゝる時

葛水に見る影もなき翁かな

此の意を了解したるものは誰、

その日ぐらしの翁あり。このことをのぶるものは誰、夜半亭蕪村なり。

(蕪村文集)

奈良團贊

也 有

青によし奈良の帝の御時、いかなる叡慮にあづかりてか、此の地の名産とはなれりけむ。世はたゞ其の道の藝くはしからば、多能はなくてもあらまし。かれよ、かしこくも風を生ずるの外は、たえて無能にして、一曲一かなでの間にもあはざれば、腰にたゞまれて、公界くがいにへつらふねぢ心もなし。たゞ木の端と思ひすてたる雲

奈良團贊

その日ぐらしの翁 神澤其綱すなはち葛の翁なり

水の生涯ならむ。さるは、桐の箱の家をも求めず、ひさごがもとの夕すゞみ、晝ねの枕に宿直して、人の心に秋風たてば、また来る夏をたのむとも見えず、物置の片隅に紙屑籠と相住して、鼠の足にけがさるれども、地紙をまくられて野ざらしとなる扇にはまさりなむ。我汝に心をゆるす。汝我に馴れて、はだか身の寐姿を、あなかしこ、人にかたる事なかれ。

袴著る日はやすまする團かな

(編衣)

おらが春

一 茶

牡丹

わが友魚淵といふ人の所に、天が下にたぐひなき牡丹咲きたりとて、云ひつき聞き傳へて、界限は更なり、よそ國の人も足を勞して、わざ／＼見に来る者日々多かりき。おのれも今日通りがけに立寄り侍りけるに、五間ばかりに花園をしつらへ、雨覆ひの蓆など今

様めかして凜々しく、白紅、紫花のさま隙間もなく開き揃ひたり。其の中に黒と黄なるは、云ひしに違はず、目を驚かすほど、珍らしく妙なるが、心を静めて再び花の有様を思ふに、婆婆々々として何となく見すばらしく、外の花にたくらぶれば、今を盛りの手弱女の側に、むなしき屍を粧ひ立て並べ置きたるやうにて、さら／＼色艶なし。是れ主人のわざくれに、紙もて作りて、葉がくれにく／＼りつけて、人を化かすにぞありける。されど腰掛臺の價を食るためにもあらで、たゞ日々の群集に酒茶費して、樂しむ主の心思ひやられて、しきりにをかしくなん。

紙屑も牡丹顔ぞよ葉がくれに

(おらが春)

露の世

樂み極りて愁ひ起るは浮世の慣ひなれど、いまだ樂み半ばならざる千代の小松の二葉ばかりの笑ひ盛りなるみどり子を、寐耳に水の押し来る如き、あら／＼しき痘の神に見込まれつゝ、いま水膿

のさなかなれば、やをら咲ける初花の、泥雨にしをれたるに等しく、側に見る目さへ苦しげにぞありける。これも二三日経たれば痘はかせぐちにて、雪解の峽、土のほろ／＼落つるやうに、瘡蓋といふもの取れば祝ひ囃して、さんだら法師といふを作りて、笹湯浴びせる真似かたして、神は送り出したれど、ますます／＼弱りて、きのふより今日は頼み少なく、終に六月二十一日の朝顔の花と共に、此の世をしほみぬ。母は死顔にすがりて、よ／＼と泣くもむべなるかな。この朝に及んでは行く水の再び歸らず、散る花の梢に戻らぬ悔言などと、あきらめ顔しても、思ひきりがたきは恩愛のきづななりけり。

露の世は露の世ながらさりながら

(おらが春)

年の暮

他力信心／＼と、一向に他力に力を入れて頼み込み候輩は、遂に他力繩に縛られて、自力地獄の焰の中へぼたん／＼と陥り候。其の次

笹湯浴びせ云々
昔、小兒の痘瘡
癒えたる後浴せ
たる酒を加へし

ちくらが沖
對島の海中

に、かゝるきたなき士凡夫を、うつくしき黄金の膚になし下されと阿彌陀佛に押し誂へに誂へばなしにして、おいてはや五體は佛染みなりたるやうに、わる濟ましなるも、自力の張本人たるべく候。問ひて曰く、如何やうに心得たらんには御流儀に叶ひ侍りなん。答へて曰く、唯だ自力他力なんのかのいふ、あくたもくたを、さらりと、ちくらが沖へ流して、さて後生の一大事は其の身を如來の御前に投げ出して、地獄なりとも、極樂なりとも、あなた様の御はからひ次第、遊ばされ下さりませと、御頼み申すばかりなり。斯くの如く決定しての上には、南無阿彌陀佛といふ口の下より、欲の網をはるの野に、手長鰻の行ひして人の目をかすめ、世渡る雁のかりそめにも、わが田へ水を引く盗み心をゆめ／＼持つべからず。然る時はあながち作り聲して念佛申すに及ばず。願はずとも佛は守りたまふべし。是れ即ち當流に安心とは申すなり。穴かしこ。

ともかくもあなたまかせの年の暮

(おらが春)

笈の小文

芭蕉

發端

百骸九竅の中に物あり。かりに名づけて風羅坊といふ。誠に
 うすものの風に破れやすからん事をいふにやあらん。狂句を好
 む事久し、終に生涯のはかりごととなす。或時は倦で放擲せん事
 を思ひ、或時はすゝんで人にかたん事をほこり、是非胸中にたゝか
 うて、是が爲に身安からず。しばらく身を立てむ事をねがへども
 これが爲にさへられ、暫く學んで愚を曉らむ事を思へども、是が爲
 に破られ、終に無能無藝にして、只此一筋に繋がる。西行の和歌に
 おける、宗祇の連歌における、雪舟の繪における、利休の茶における、
 其の貫通する物は一なり。しかも風雅におけるもの、造化にした
 がひて四時を友とす。見る所花にあらずといふ事なし。思ふ所
 月にあらずといふ事なし。像花かたちにあらざる時は、夷狄にひとし。

神無月の初
貞享四年

心月にあらざる時は鳥獸に類す。夷狄を出で鳥獸を離れて、造化
 にしたがひ、造化にかへれとなり。神無月の初、空定めなきけしき、
 身は風葉の行末なき心地して、

旅人と我名呼ばれんはつしぐれ

又山茶花をやとくにして

岩城の住、長太郎といふもの、此脇を付けて、其角亭において關送
 りせんと、もてなす。

時は冬よし、野をこめん旅のつと

此句は露沾公より下し侍りけるを、はなむけの初として、舊友の
 親疎門人等あるは詩歌文章もて訪ひ、或は草鞋の料を包んで志を
 見す。かの三月の糧を集むるに力を入れず。紙布綿子などいふ
 もの、帽子したうづやうのもの、心々に送りつどひて霜雪の寒苦を
 いとふに心なし。あるは小船をうかべ、別墅にまうけし草庵に酒
 肴携來りて行方を祝ひ、名残ををしみなどするこそ、ゆるある人の

三月の糧云々
莊子逍遙遊「適
千里者、三月聚
糧」

首途するにも似たりと、物めかしく覺えられけれ。

(卯辰紀行)

奥の細道

芭蕉

百代の過客
李白「夫天地者
萬物之逆旅、光
陰者百代之過
客、而浮生若夢、
爲歡幾何」

杉風が別墅
探茶庵

月日は百代の過客にして、ゆきかふ年も亦旅人なり。舟のうへに生涯をうかべ馬の口とらへて老を迎ふる者は、日々旅にして旅を栖すまとす。古人も多く旅に死せるあり、予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて漂泊の思ひやます、海濱にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巢を拂ひてや、年も暮れ、春立てる霞の空に、白川の關越えんと、そゞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて取る物手につかず、もゝひきの破れをつゞり笠の緒つけかへて、三里に灸すうるより、松島の月まづ心にかゝりて、住める方は人に譲り杉風が別墅に移る。

草の戸も住みかはる代ぞ雛の家

おもて八句を庵の柱にかけおき、彌生も末の七日明ばのの空鷹々

として、月は有明にて、光をさまれるものから不二の峯幽にみえて、上野谷中の花の梢、又いつかはと心細し。むつまじきかぎり、は宵よりつどひて、舟にのりて送る。千住といふ所にて舟をあがれば、前途三千里のおもひ胸にふさがりて、幻の巷に離別の涙をそゞぐ。

行く春や鳥は啼き魚の目は泪

これを矢立の初めとして、行く道なほすゝます。人々は途中に立並びて後影の見ゆる迄はと見送るなるべし。ことし元祿二とせにや、奥羽長途の行脚たゞかりそめに思立ちて、吳天に白髪の恨を、重ぬといへども、耳にふれていまだ目に見ぬ境、もし生きてかへらば、と定めなきたのみの末をかけ、其の日漸く早加といふ宿にたどり着きにけり。瘦骨の肩にかゝれる物まづ苦しむ。たゞ身すがらにと出立ち侍るを、紙子一重は夜のふせぎ、ゆかた雨具墨筆のたぐひ、あるはさがたき餞などしたるは、さすがに打捨てがたくて路次のわづらひとなれるこそわりなけれ。

鳥は啼き
陶淵明「羈鳥戀
舊林、池魚思故
淵」

室の八島に詣づ。同行曾良が云ふ、此の神は木花咲耶姫の神と申して、富士一體なり。無戸室に入りて焼き給ふちかひのみ中に、火火出見の尊生れ給ひしより室の八島と申す。又煙をよみ習はし侍るも、この謂なり。はた、このしろといふ魚を禁す。縁記の旨世につたふる事も侍りし。

卅日、日光山の麓に泊る。あるじの云ひけるやう、我名を佛五左衛門といふ、萬正直を旨とする故に、人かくは申し侍るまゝ、一夜の草の枕もうちとけて休み給へといふ。いかなる佛の、濁世塵土に示現して、かゝる桑門の乞食順禮ごときの人をたすけ給ふにやと、主のなすことに心をとどめてみるに、たゞ無智無分別にして正直偏固のものなり。剛毅木訥の仁に近きたぐひ、氣稟の清質尤も尊ぶべし。

卯月朔日、御山に詣拜す。往昔、此の御山を二荒山と書きしを、空海大師開基の時、日光と改め給ふ。千歳未來をさとり給ふにや、今

剛毅木訥
論語

黒髪山
男體山

この御光一天にかゞやきて、恩澤八荒にあふれ、國民安堵の栖穩かなり。猶憚多くて筆をさし置きぬ。

あらたふと青葉若葉の日の光

黒髪山は、かすみかゝりて雪いまだ白し。

剃りすてゝくろかみ山に衣がへ 曾良

曾良は、河合氏にして惣五郎と云へり。芭蕉の下葉に軒をならべて、予が薪水の勞をたすく。このたび松島象潟の眺めとも、せん事を悦び、かつは羈旅の難をいたはらんと、たびだつ曉、髪を剃りて墨染にさまをかへ、改めて惣五を宗悟とす。よりて黒髪山の句有り。衣がへの二字、力ありて聞ゆ。

廿餘町、山に登りて瀧あり。岩洞の頂より飛流して、百尺千巖の碧潭におちたり。岩窟に身をひそめ入りて、瀧のうらよりみれば、うらみの瀧と申傳へ侍るなり。

しばらくは瀧に籠るや夏の初

夏の初
陰曆四月十六日
より七月十六日
までの間、夏行

那須の黒羽といふ所にしる人あれば、これより野越にかゝりて直道を行かんとす。遙に一村を見かけて行くに、雨ふり日くる。農夫の家に一夜をかりて、明くれば又野中を行く。そこに野飼の馬あり。草刈をのこに歎きよれば、野夫といへどもさすがに情しらぬにはあらず。いかゞすべきや。されども此野は縦横にわかれて、うひくしき旅人の道ふみたがへんあやしう侍れば、此の馬のとどまる處にて馬をかへし給へと、かし侍りぬ。ちいさきものふたり、馬の跡したひてはしる。一人は小姫にて名をかさねと云ふ。聞きなれぬ名のやさしかりければ

かさねとは八重撫子の名なるべし 曾良

やがて人里に至れば、あたひを鞍壺に結付けて馬をかへしぬ。黒羽の館代、浄坊寺何某の方に訪づる。思ひがけぬ主の悦び、日夜語りつゞけて、其の弟桃翠などいふが朝夕勤めとぶらひ、自らの家にも伴ひて、親屬の方にも招かれ、日をふるまゝに、ひとひ郊外に

玉藻の前
九尾金毛の老狐
の化したる妖
姫、後射殺され
て石に化るといふ
を殺生石といふ

足駄を拜む
行者堂に安置せ
る役行者の像な
るべし

佛頂和尚
鹿島根本寺の
僧、後此の地に
幽棲せしか、芭
蕉この和尚につ
きて禪を知る

逍遙して犬追物の跡を一見し、那須の篠原を分けて玉藻の前の古墳をとふ。夫より八幡宮に詣づ。與市扇の的を射し時、別しては我國の氏神正八幡と誓ひしも、此の神社にて侍りと聞けば、感應殊にしきりに覺えらる。くるれば桃翠が宅に歸る。

修驗光明寺といふあり。そこに招かれて行者堂を拜す。

夏山に足駄を拜む首途哉

當國雲岸寺のおくに、佛頂和尚山居の跡あり。

たてよこの五尺にたらぬ草の庵

むすぶもくやし雨なかりせば

と松の炭して、岩にかきつけ侍りと、いつぞや聞え給ふ。其の跡見んと雲岸寺に杖をひけば、人々すゝんでともにいざなひ、若き人多く道の程うちさわぎで、覺えずかの麓に至る。山はおくあるけしきにて溪路、遙に松杉黒く苔したゝりて、卯月の天いま猶寒し。十景つくる所、橋を渡りて山門に入る。

妙禪師
宋の名僧にて高
峰といふ山に處
りて生涯を鎖

法雲法師
宋僧に法雲とい
ふもあれど法

運なりば石室に
籠りて馬糞を焚
き字を煮て食ひ
たりしといふ名
僧

清水ながるゝ
西行一道のべに
清水流るゝ柳蔭
に
立ち止りつれ

三關
泉、白河、勿來
を東國の三關と
いふ

秋風を
能因一都をば霞
さ共に立ちしか
ど秋風ぞ吹く白

紅葉を佛に
頼政一都にはま
だ青葉にて見し
かども紅葉散り

清輔の筆
袋草子

扱かのあとはいづくの程にやと、後の山によちのばれば、石上の
小菴、岩窟にむすびかけたり。妙禪師の死關、法雲法師の石室を見
るが如し。

木啄も庵はやぶらず夏木立

と取りあへぬ一句を柱に残し侍りし。是より殺生石に行く。館
代より馬にて送らる。此の口付のをのこ、短冊得させよと乞ふ。
やさしき事を望み侍るものかなと、

野を横に馬引きむけよ郭公

殺生石は、温泉の出づる山陰にあり。石の毒氣いまだほろびず。
蜂蝶のたぐひ眞砂の色の見えぬほどかさなり死す。又清水なが
るゝの柳は、蘆野の里に有りて田の畔にのこる。此の所の郡守、戸
部某の此の柳みせばやなど折々にの給ひ聞え給ふを、いづくの程
にやと思ひしを、今日此の柳のかげにこそ立ちより侍りつれ。
田一枚うゑて立ちさる柳かな

心もとなき日數かさなるまゝに、白川のせきにかゝりて旅心定
りぬ。いかで都へと便求めしもことわりなり。中にも此の關は、
三關の一にして風騒の人心をとゞむ。秋風を耳にのこし、紅葉を
俤にして青葉の梢猶あはれなり。卯の花の白妙に、茨の花の咲き
そひて雪にもこゆる心地ぞする。古人冠を正し、衣装を改めし事
など、清輔の筆にもとゞめ置かれしとぞ。

卯の花をかざしに關の晴着哉

曾 良

とかくして越え行くまゝに、阿武隈川をわたる。左に會津根高く、
右に岩城、相馬、三春の庄、常陸下野の地をさかひて、山つらなる。か
げ沼といふ所を行くに、けふは空くもりて物影うつらす。須賀川
の驛に、等躬といふ者を尋ねて四五日とゞめらる。先づ白川の關
いかに越えつるやと問ふ。長途のくるしみ身心つかれ、且は風景
に魂うばゝれ、懷舊に腸を断ちて、はかばかしう思ひめぐらさず。
風流のはじめやおくの田植うた

僧
可伸
椽ひろふみ山
山家集や杜甫の
句に見ゆ

無下にこえんもさすがにと語れば、脇第三とつゞけて三卷となしぬ。此の宿の傍に、大なる栗の木陰をたのみて世をいとふ僧あり。椽ひろふみ山もかくやと間に覚えられて、ものにかきつけ侍る。その詞

栗といふ文字は、西の木とかきて西方浄土に便ありと、行基菩薩の一生杖にもはしらにも、此の木を用ひ給ふとかや

世の人の

此の句の脇「ま
れに蟹のこまる
露草」栗齋

世の人のみつけぬ花や軒の栗

等躬が宅を出でて五里ばかり、檜皮の宿をはなれて浅香山あり。路より近し。此のあたり沼多し。かつみ刈るころもや、近うなれば、いづれの草をはながつみとはいふぞと、人々にたづね侍れども更にしる人なし。沼をたづね人にとひ、かつみかつみと尋ねありきて、日は山のはにかゝりぬ。二本松より右にきれて、黒塚の岩屋一見し福島にやどる。明くれば、しのおもち摺の石をたづねて忍の里に行く。遙か山陰の小里に、石なかば土に埋れてあり。里

黒塚
安達が原

の童部の来りて教へける、むかしは此の山の上に侍りしを、往來の人の麥草をあらして、此の石を試み侍るをにくみて、此の谷につき落せば、石の面下さまにふしたりといふ。さもあるべき事にや。

早苗とる手もとや昔しのお摺

月の輪の渡を越えて、瀬の上といふ宿に出づ。佐藤庄司か舊跡は、左の山ぎは一里半ばかりに有り。飯塚の里、鯖野と聞きて、尋ね行くに、丸山といふに尋ねあたる。是庄司が舊館なり。麓に大手の跡など人のをしふるに任せて、泪をおとし、又かたはらの古寺に一家の石碑を残す。中にも二人の娘がしるし先づ哀なり。女なれどもかひなくしき名の世に聞えつるものかなと、袂をぬらしぬ。墮涙の石碑も遠きにあらず。寺に入りて茶を乞へば、こゝに義經の太刀、辨慶が笈をとめて什物とす。

笈も太刀も五月にかざれ紙幟

五月朔日の事なり。其の夜飯塚にとまる。温泉あれば湯に入

墮涙の名碑
晋、羊祐の爲建
てられたる岨山
の碑

古寺
醫王寺

藤中將實方
笠島道祖神の前
を下馬せしめて
通りし爲落馬して
衰記に見ゆ
かたみのすゝき
新古今集、西行
一朽ちもせぬそ
めおきて枯野を留
る薄形見にぞ見

りて宿をかるに、土座に蓆を敷きてあやしき貧家なり。灯もなけれ
ば、ろりの火かげに寢所をまうけて臥す。夜に入りて雷鳴り
雨しきりに降りて、臥せる上よりも、蚤蚊にせゝられて眠らず。
持病さへおこりて、消入るばかりになん。短夜の空もやうく明
くれば、又旅立ちぬ。猶夜の名残こゝろすゝます。馬をかりて桑
折の驛に出づ。遙なる行末をかゝへてかゝる病覺束なしといへ
ど、羈旅邊土の行脚、捨身無常の觀念、道路に死なん、是天の命なりと
氣力聊かとり直し、路縦横にふんで、伊達の大木戸を越す。燈摺白
石の城を過ぎ笠島の郡に入れば、藤中將實方の塚はいづくの程な
らんと、人にとへば、これよりはるかに右に見ゆる山ぎはの里をみ
のわ笠島といふ。道祖神の社、かたみの薄今にありとをしふ。こ
のころの五月雨に道いと悪しく身つかれ侍れば、よそながら眺め
やりて過ぐるに、蓑輪かさしまも五月雨の折にふれたりと、
笠島やいづこさ月のぬかり道

岩沼に宿る。

武隈の松
橋季通「武隈の
松は二木を都人
みかか問はむ」
能因法師
能因「武隈の松
は千年を經ても
我は來つらむ」

武隈の松にこそ目さむる心地はすれ。根は土際より二木にわ
かれて昔のすがたうしなはずと知らる。先づ能因法師おもひ出
づ。往昔陸奥守にて下りし人、此の木を伐りて、名取川の橋杭にせ
られたる事などあればにや、松は此たび跡もなしとは詠みたり。
代々あるは伐り、あるひは植ゑつぎなどせしと聞くに、今はた千歳
のかたちとゝのほひて、めでたき松のけしきになん侍りし。
武隈の松みせ申せ遅ざくら 舉 白

と云ふものゝ、饑別したりければ、

櫻より松は二木を三月ごし

名取川渡りて仙臺に入る。あやめふく日なり。旅宿を求めて、四
五日逗留す。こゝに畫工加右衛門といふものあり。聊か心ある
ものと聞きて、知る人になる。此の者、年頃さだかならぬ名所を考
置き侍ればとて、一日案内す。宮城野の萩茂りあひて、秋のけしき

みさぶらひ
古今集「み侍み
傘と申せ宮城野
の木の下露は雨
にまされり」

おもひやらる。玉田横野つゝじが岡はあせびさく頃なり。日影ももらぬ松の林に入りて、こゝを木の下といふとぞ。むかしもかく露深ければこそみさぶらひみかさはよみたれ。薬師堂天神のみやしるなど拜みて、その日はくれぬ。猶松島象潟の所々晝きて送る。かつ紺のそめ緒つけたるわらぢ二足餞す。さればこそ風流のしれもの、こゝにいたりてその實をあらはす。

あやめ草足に結ばんわらぢの緒

かの晝圖に任せてたどり行けば、おくの細道の山際にとふの菅あり。今も年々十符のすがこもを調へて、國守に献すといへり。

壺碑 市川村多賀城に有り

つばのいしふみは、高さ六尺餘横三尺ばかりか。苔をうがちて文字幽かなり。四維國界の里數をしるす。此の城は、神龜元年、按察使鎮守府將軍大野朝臣東人之所置也。天平寶字六年、參議東海東山節度使同將軍惠美朝臣朝獨修造。而して十二月朔日と有り。

末の松山
古今集東歌「君
をおきてあだし
心をわが持たし
末の松山波も越
えなむ」

つなでかなしも
古今集東歌「み
ちのくはいつく
はあれど鹽がま
の浦に舟の綱
手かなしも」

聖武皇帝の御時にあたれり。むかしよりよみ置けるうた枕多く語りつたふといへども、山崩れ川落ちて道改り、石は埋れて土にかくれ、木は老いて若木にかはれば、時うつり代變じて、其の跡たしかならぬ事のみを、こゝにいたりて疑なき千歳の記念、今眼前に古人の心を閱す。行脚の一徳、存命の悦、羈旅の勞をわすれて、なみだもおつるばかりなり。それより野田の玉川、沖の石をたづぬ。末の松山は、寺を造りて末松山といふ。松のあひ／＼みな墓原にて、羽をかはし枝を連ぬるちぎりの末も、終にはかくの如しと悲しさもまさりて、鹽がまのうらに入相のかねを聞く。五月雨の空聊か晴れて夕月夜かすかに、籬が島もほど近し。蜚の小舟こぎつれて、さかな分つ聲々に、つなで悲しもとよみけん心もしられて、いと哀なり。その夜目盲法師の琵琶をならして、奥淨瑠璃といふ物をかたる。平家にもあらず、舞にもあらず、鄙びたる調子うちあげて枕近うかしましけれど、流石に邊土の遺風忘れざるものから、殊勝に

和泉三郎
秀衡の三男

覚えらる。早朝鹽竈の明神に詣づ。國守再興せられて、宮ばしらふとしく彩椽きらびやかに、石の階九仞にかさなり、朝日朱の玉垣を輝かす。かゝる道のはて塵土の境まで、神靈あらたにましますこそ吾が國の風俗なれと、いと貴けれ。神前に古き寶燈有り。かねの戸びらの面に、文治三年和泉三郎寄進とあり。五百年來の俤、今日のまへに浮びてそゞろに珍し。かれは勇義忠孝の士なり。佳名今にいたりてしたはずといふ事なし。誠に人は能く道をつとめ義を守るべし。名も亦是にしたがふといへり。日既に午に近し。舟をかりて松島に渡る。其の間二里餘、雄島の磯につく。抑事ふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡洞庭西湖をはちす、東南より海を入れて、江の中三里浙江の潮をたゞふ。島々の數を盡して、歌つものは天を指し、ふすものは波に匍匐ふ。あるは二重にかさなり三重にたゞみて、左にわかれ右に連る。負へるあり抱けるあり、兒孫を愛するがごとし。松のみどり濃かに、枝葉

雲居禪師
土佐の人、後仙臺侯に聘せられたる瑞巖寺に住したる名僧

汐風に吹きたわめて、屈曲おのづからためたるがごとし。其の氣色宵然として美人の顔を粧ふ。ちはやぶる神の昔、大やまつみのなせるわざにや、造化の天工、いづれの人か筆を揮ひ詞をつくさん。雄島がいそは地つゞきて、海に出でたる島なり。雲居禪師の別室の跡、坐禪の石など有り。はた松の木陰に世をいとふ人も、まれに見え侍りて、落穂松笠などうち煙りたる草の庵しづかにすみなし、いかなる人とは知られずながら、まづ懐かしく立寄るほどに、月海にうつりて晝のながめ又改む。江上にかへりて宿を求むれば、窓をひらき二階をつくりて、風雲の中に旅寢すること、あやしきまで妙なる心地はせらるれ。

松島や鶴に身をかれ時鳥 曾 良

予は口を閉ぢて、眠らんとしていねられず。舊庵をわかるゝ時、素堂、松島の詩有り。原安適、松が浦島の和歌を送らる。袋をといてこよひの友とす。且杉風濁子が發句あり。

眞壁の平四郎
入宋の僧、法心
伊達正宗に歸依
せらる

見佛聖
廬を雄島に結び
て苦練十二年、
法華經を誦する
こゝ六萬遍に及
ぶさいふ

こがね花さく
萬葉集、家持「す
めらぎの御代榮
えむさあづまな
るみちのく山に
黄金花咲く」

三代

十一日、瑞巖寺に詣づ。當寺三十二世のむかし、眞壁の平四郎出家して、入唐歸朝の後開山す。其の後に雲居禪師の徳化によりて、七堂いらか改りて金碧莊嚴光を輝し、佛土成就の大伽藍とはなれりける。彼の見佛聖の寺はいづくにやと慕はる。十二日、平泉と心ざしあねはの松、緒だえの橋など聞傳へて、人跡まれに雉兎芻蕘の行きかふ道そこともわかず、終に道ふみたがへて、石の巻といふ湊に出づ。こがね花さくとよみて奉りたる金花山、海上に見渡し、數百の廻船入江につどひ、人家地を争ひてかまどのけぶり立ちつゞきたり。思ひかけず斯る所にも來れる哉と、宿からんとすれど、さらに宿かす人なし。漸まどしき小家に一夜をあかして、明くれは又しらぬ道まよひ行く。袖のわたり、尾ぶちの牧、まの、萱原などよそめに見て、遙なる堤を行く。心細き長沼にそうて、戸伊摩といふ處に一宿して平泉に至る。その間廿餘里ほどと覺ゆ。

三代の榮耀一睡の中にして、大門のあとは一里こなたにあり。

清衡、基衡、秀

國破れて云々
杜甫「國破山河
在、城春草木深」

秀衡が跡は、田野に成りて金鷄山のみ形を残す。先づ高館にのぼれば、北上川南部より流るゝ大河なり。衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落入る。康衡等が舊跡は、衣が關を隔て、南部口をさし堅め、夷をふせぐと見えたり。偕も義臣すぐつて此の城にこもり、功名一時のくさむらとなる。國破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠うち敷きて時のうつるまで涙を落し侍りぬ。

夏草や兵どもが夢の跡

曾良

兼て耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像をのこし、光堂は三代の棺ををさめ、三尊の佛を安置す。七寶ちりうせて、玉の屏風にやぶれ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廢空虚の叢と成るべきを、四面新に圍みて甍を覆うて風雨を凌ぐ、暫時千載の記念とはなれり。

兼房
義經没落の時増
尾十郎兼房白髮
引亂して奮戦せ
し事、義經記に
見ゆ

五月雨のふりのこしてや光堂
 南部道遙かにみやりて、岩手の里に泊る。 小黒崎みつの小嶋を
 過ぎて、鳴子の湯より尿前の關にかゝりて、出羽の國に越えんとす。
 此の道旅人まれなる處なれば、關守にあやしめられて、漸として關
 をこす。 大山をのぼつて日すでに暮れければ、封人の家をみかけ
 て舍を求む。 三日風雨あれて、よしなき山中に逗留す。

蚤虱馬の尿する枕もと

主の云ふやう、是より出羽國に大山を隔て、道さだかならざれば、道しるべの人を頼みて越ゆべきよしを申す。 さらばと云ひて人を頼み侍れば、究竟の若者反脇差をよこたへ、檜の杖を携へて我々が先に立ちて行く。 けふこそ必危きめにも逢ふべき日なれと、辛き思ひをなして後について行く。 主のいふにたがはず、高山森々として一鳥聲きかず。 木の下闇茂りあひて、夜行くがごとし。 雲端に土ふる心地して篠の中踏分け、水をわたり、岩に蹴きて

一鳥聲きかず
 王安石「一鳥不
 鳴山更幽」

清風
 俳人、豪商なり

肌につめたき汗を流して、最上の庄に出づ。 かの案内せしをのこの云ふやう、此の道必不用の事あり、恙なう送りまゐらせて、仕合したりと、悦びて別れぬ。 あとに聞きてさへ胸とゞろくのみなり。 尾花澤にて、清風と云ふ者をたづぬ。 かれは富める者なれども、志いやしからず。 都にも折々かよひてさすがに旅の情をも知りたれば、日比とゞめて、長途のいたはりさまへにもてなし侍る。

涼しさを我宿にしてねまる也

這出でよかひやが下の蟾の聲

まゆはきを俛にして紅粉の花

蠶飼する人は古代のすがた哉

曾良

山形領に立石寺りゅうしゃくじといふ山寺あり。 慈覺大師の開基にて、殊に清閑の地なり。 一見すべきよし人々のすゝむるによつて、尾花澤より取つてかへし、其の間七里計なり。 日いまだくれず、麓の坊に宿かり置きて、山上の堂に登る。 岩に巖を重ねて山とし、松柏年ふり

土石老いて苔滑かに、岩上の院々扉を閉ぢて物の音聞えず。岸をめぐり岩を這ひて、佛閣を拜し、佳景寂寞として心すみ行くのみ覺ゆ。

閑さや岩にしみ入るせみの聲

最上川のらんと、大石田と云ふ所に日和を待つ。こゝに古き俳諧のたねこぼれて、忘れぬ花の昔をしたひ、芦角一聲の心をやはらげ、此の道にさぐり足して、新古二道にふみまよふといへども、道しるべする人しなればと、わりなき一卷をのこしぬ。此の度の風流こゝにいたれり。

最上川はみちのくより出で、山形を水上とす。こてん、隼などいふおそろしき難所有り。板敷山の北を流れて、はては酒田の海に入る。左右山覆ひ、しげみの中に船を下す。是に稻つみたるをや、いな舟といふならし。白糸の瀧は青葉のひま／＼に落ちて、仙人掌岸に臨みて立つ。水漲りて舟あやふし。

いな舟
古今集にも稻舟
を詠めり

圖司左吉
俳號、露丸また
呂丸ともいふ、
年四十に足らず
して歿す、翁の
悼句「當歸より
あはれば塚の蓋
草」

權現
羽黒權現、今、
出羽神社

月山
今、國幣中社。
月山神社、月讀
命を祭る
湯殿
湯殿山神社あり

五月雨をあつめて早し最上川

六月三日、羽黒山にのぼる。圖司左吉といふものを尋ねて、別當代會覺阿闍梨に謁す。南谷の別院に舍して、憐愍の情こまやかにあるじせらる。四日、本坊において俳諧興行有難や雪をかをらす南谷

五日、權現に詣づ。當山開闢能除大師は、いづれの代の人といふ事をしらす。延喜式に、羽州里山の神社とあり。書寫黒の字を、里山となせるにや、羽州黒山を中略して、羽黒山といふにや。出羽といへるは、鳥の毛羽を此の國の貢に獻ると、風土記に侍るとやらん。月山湯殿を合せて三山とす。當寺武江東叡に屬して、天台止觀の月明かに、圓頓融通の法の灯かゝげそひて、僧坊棟をならべ、修驗行法をはげまし、靈山靈地の驗効、人貴びかつ恐る。繁榮長へにして、めでたき御山といひつべし。

八日、月山にのぼる。木綿しめ身に引きかけ、寶冠に頭を包み、強

龍泉に云々
此泉にて鍛冶な
れし劍は堅利な
り
干將莫耶の云々
吳人、干將、そ
の妻莫邪、名劍
二口を作して閻
闔に献ずといふ
炎天の梅花
禪林句集「雪裏
芭蕉摩詰齋「炎
天梅葉簡齋詩」
行尊僧正のうた
金葉集「諸共
あはれと思へ山
櫻花より外に知
る人もなし」

力といふものに導かれて、雲霧山氣の中に氷雪を踏んでのぼる事
八里、さらに日月行道の雲關に入るかとあやしまれ、息絶え身凍え
て、頂上に臻れば、日没して月顯る。笹を敷き篠を枕として、臥して
明くるを待つ。日出で、雲消ゆれば、湯殿に下る。谷の傍に鍛冶
小屋といふあり。此の國のかち靈水を選びて、こゝに潔齋して劍
を打ち、終に月山と銘を切つて世に賞せらる。彼の龍泉に劍を淬
ぐとかや。干將莫耶のむかしをしたふ道に、堪能の執あさからぬ
事しられたり。岩に腰かけてしばし休らふほど、三尺ばかりなる
櫻のつばみ半ば開けるあり。降りつむ雪の下に埋れて、春をわす
れぬ遅ざくらの花の心わりなし。炎天の梅花、こゝにかをるがご
とし。行尊僧正のうたの哀れも、こゝにおもひ出で、猶まさりて
覺ゆ。すべて此の山中の微細、行者の法式として他言する事を禁
ず。よつて筆をとめて記さず。坊にかへれば、阿闍梨の需に依
りて、三山順禮の句をたんざくに書す。

涼しさやはの三日月の羽黒山

雲のみね幾つくづれて月の山

語られぬ湯殿にぬらす袂哉

湯どの山錢ふむ道の泪哉 曾 良

羽黒を立ちて、鶴が岡の城下長山氏重行といふものの家にむか
へられて、俳諧一卷あり。左吉もともに送りぬ。川舟にのりて、酒
田のみなとに下る。淵庵不玉といふ醫師のもとに宿す。

あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ

暑き日を海に入れたりもがみ川

江山水陸の風光數をつくして、今象潟に方寸をせむ。酒田のみ
なとより、東北の方山をこえ磯を傳ひいさごを踏みて、其の際十里、
日影や、傾く比、汐風真砂をふき上げ、雨朦朧として鳥海の山かく
る。闇中に摸索して雨も又奇なりとせば、雨後の晴色又たのもし
と、螢のとまやに膝を容れて、雨のはるゝを待つ。その朝、天よく霽

雨も又奇なり
蘇東坡「水光潋
滟晴偏好、山色
空濛雨亦奇、若
把西湖比西子、淡
粧濃抹總相宜」

花の上こぐ
山家集「象潟の
櫻は波にうづも
れて花の上こぐ
あまのつり舟」

奥の細道

れて朝日はなやかにさし出づるほどに、象潟の渚に舟をうかぶ。先づ能因島に舟をよせて三年幽居の跡をとぶらひ、むかうの岸に舟をあがれば、花の上こぐとよまれしさくらの老木、西行法師のかたみを残す。江上に御陵あり。神功皇后の御墓といふ。寺を干満珠寺といふ。此のところに行幸ありし事いまだ聞かず、いかなる事にや。此の寺の方丈に坐して簾を捲けば、風景一眼の中に盡きて、南に鳥海天をさへ、其の影うつりて江にあり。西はむやむやの關路をかぎり、東に堤を築きて秋田にかよふ道、遙かに海北に構へて、浪うち入るゝ所を汐ごしといふ。江の縦横一里ばかり、俤松島にかよひてまたことなり。松島は笑ふがごとく、象潟はうらむがごとし。寂しさに悲しみを加へて、地勢魂をなやますに似たり。

西施
越の美女、范蠡
の謀により、吳王
に贈る

象潟や雨に西施かねぶのはな
汐越や鶴脛ぬれて海涼し

祭 禮

象がたや料理何くふ神祭

曾 良

蟹の家や戸板を敷きて夕すゞみ

みの、國商人
低 耳

岩上に雉鳩の巢を見る

浪こえぬ契ありてやみさごの巢

曾 良

酒田の餘波日をかさねて、北陸道の雲にのぞみ遙々のおもひ胸をいたましめ、加賀の府まで百三十里ときく。鼠の關をこゆれば、越後の地に歩行を改めて越中の國市振の關にいたる。此の間九日、暑濕の勞に神をなやまし、病發りて事をしるさず。

文月や六日も常の夜には似す

あら海や佐渡に横ふ天の河

今日は、親不知子しらす、犬もどり、駒がへしなどいふ北國一の難所をこえてつかれ侍れば、枕引きよせて寐たるに、一間へだてゝ西の方に、わかき女の聲二人ばかりときこゆ。年老いたる男の聲も

鼠の關
念珠が關とも書

奥の細道

白波の
新古今集「白波
の寄する活に身
なづくす蟹の子
すなれば宿も定め

衣のうへの
兩人とも法體な
見れば旅僧などい
見えしなるべしに

交りて物語するをきけば、越後國新潟といふ所の遊女なりし。伊勢參宮すとて、此の關まで男の送りて、あすは古郷にかへす文したゝめて、はかなき言傳などしやるなり。白波のよする渚に、身をはふらかし、海士の子の世を淺ましく下りて、定なき契、日日の業因いかにつたなしと、物いふをきくゝ寐入りて、朝たび立つ我々にむかひて、行へしらぬ旅路のうさ、餘り覺束なうかなしく侍れば、見えかくれにも御跡をしたひ侍らん。衣のうへの御情に、大慈のめぐみをたれて、結縁せさせ給へと泪を落す。不便の事には侍れども、我々は所々にてとゞまるかた多し。たゞ人の行くにまかせて行くべし。神明の加護必つゝがなかるべしと、いひすて、出でつゝ、哀さしばらくやまざりけらし。

一家に遊女もねたり萩と月
曾良にかたれば、かきとめ侍る。

くろべ四十八が瀬とかや、數しらぬ川をわたりにて、那古といふ浦

擔籠の藤浪
萬葉集、家持「多
祐の浦の底さへ
にほふ藤浪をか
さしてゆかむ見
ぬ人の爲」

に出づ。擔籠の藤浪は春ならずとも、初秋の哀とふべきものをと、人に尋ねれば、これより五里ばかり磯づたひして、むかうの山陰に入り、蟹の苦ぶき幽かなれば、芦の一夜の宿かすものあるまじと、いひおどされて、加賀の國に入る。

早稻の香や分入る右はありそうみ

卯の花山、くりからが谷を越えて、金澤は七月中の五日なり。爰に大阪よりかよふ商人、何處といふ者あり。それが旅宿をとともにす。一笑といふものは、此の道にすける名のほのゝ聞えて、世に知る人も侍りしに、去年の冬早世したりとて、其の兄追善をもよほすに、

塚も動け我が泣く聲は秋の風

ある草庵にいざなはれて、

秋涼し手毎にむけや瓜茄子

途中喰

あか〜と日は難面くも秋の風

小松といふ所にて

しほらしき名や小松吹く萩薄

此の所太田の神社に詣づ。さねもりが甲、錦の切あり。往昔源氏に屬せし時、義朝公より給はらせ給ふとかや。げにも平士の物にあらず。目庇より吹返しまで、菊唐草のほりもの金をちりばめ、龍頭に鍬形打ちたり。實盛討死の後、木曾義仲願狀にそへて、此の社にこめられ侍るよし、樋口の次郎が使せし事ども、まのあたり縁記に見えたり。

むざんやな甲の下のきりすゝす

山中の温泉に行くほど、白浪が嶽あとに見なして歩む。左の山際に観音堂あり。花山の法皇三十三所の順禮とげさせ給ひて後、大慈大悲の像を安置し給ひて、那谷と名付け給ふとかや。那智谷組の二字をわかち侍りしとぞ。奇石さまゝに古松うゑならべて、萱ぶきの小堂、岩の上につくりかけて、殊勝の土地なり。

さねもりが云々
齋藤別當實盛、
平宗盛に仕ふ、
加賀篠原の役に
戦死す

むざんやな
謡曲「實盛」
白根が嶽
白山

石山の石より白し秋の風

温泉に浴す。其の功有馬に次ぐと云ふ。

山中や菊はたをらぬ湯の匂

あるじとするものは、糸之助とていまだ小童なり。彼が父俳諧を好み、浴の真室若かりしむかし、爰に來りし比、風雅に辱ぢしめられて、浴に歸りて貞徳の門人となつて、世にしらる。功名の後、此の一村判詞の料を請けずといふ。今更むかしがたりとは成りぬ。曾良は腹を病みて、伊勢の國長嶋といふ所にゆかりあれば、先立ちて行くに、

行きくゞて倒れふすとも萩の原 曾良

と書置きたり。行くものの悲しみ残る者のうらみ、雙鳧のわかれて雲にまよふがごとし。予も亦、

けふよりや書付消さん笠の露

大聖寺の城外、全昌寺といふ寺に泊る。猶加賀の地なり。曾良も

糸之助
家號、泉屋

雙鳧の云々
前漢書、蘇武別
李陵詩「雙鳧俱
北飛、一鳧獨南
翔、子當留此館
我當歸故鄉」

書付
同行二人

前の夜この寺にとまりて、

終夜秋風きくやうらの山

と残す。一夜のへだて、千里に同じ。われも秋風を聞きつゝ衆寮に臥せば、明ぼのの空近う讀經の聲すむまゝに、鐘板鳴つて食堂に入る。けふは越前國へと心早卒にして堂下に下るを、若き僧ども紙硯をかゝへ、階のもとまで追ひ來る。折ふし庭中の柳ちれば、

庭掃いて出づるや寺にちる柳

とりあへぬさままして、草鞋ながら書きすつ。越前の境、吉崎の入江を舟に棹して、汐ごしの松を尋ぬ。

よもすがら嵐に波をはこばせて

月をたれたる汐ごしの松

西行

此一首にて致景盡きたり。もし一辯を加ふるものは、無用の指を立つるがごとし。

丸岡天龍寺の長老古きちなみあれば尋ぬ。又金澤の北枝とい

無用の指云々
莊子、駢拇、駢於
足者、連無用之
肉也。枝於手者
樹無用之指也。

北枝
磨工、所謂蕉門
十哲の一人

ふもの、かりそめに見送りて此處までしたひ來る。所々の風景過さず思ひつゞけて、折ふしあはれなる作意など聞ゆ。今既に別のぞみて、

物かいて扇引きさく名残哉

五十町山に入りて、永平寺を禮す。道元禪師の御寺なり。邦畿千里を避けて、かゝる山陰に跡をのこし給ふも、貴きゆゑありとかや。

福井は三里ばかりなれば、夕飯したゝめて出づるに、たそがれの路たどし。爰に等裁といふ古き隠士あり。いづれの年にか、江戸に來りて予を尋ぬ、遙か十とせあまりなり。いかに老いさらぼひてあるや、將に死にけるにやと、人に尋ね侍れば、いまだ存命して、そこくとをしふ。市中ひそかに引入りて、あやしの小家に夕顔へちまの這ひかゝりて、鶏頭箒木にとぼそをかくす。扱は此のうちこそと門を叩けば、侘しげなる女の出で、いづくよりわた

り給ふ道心の御坊にや。あるじは、此のあたり某と云ふものの方
 に行きぬ。もし用事あらば尋ね給へといふ。かれが妻なるべし
 としらる。昔物語にこそかゝる風情は侍れと、やがて尋ね逢ひで、
 その家に二夜泊りて、名月は敦賀のみなとにと旅だつ。等裁もと
 もに送らんと、裾をかしようかゞげて、路の枝折とうかれたつ。漸白
 根が嶽かくれて、比那が嶽顯る。あさむつの橋をわたりて、玉江の
 蘆は穂に出でにけり。鶯の關を過ぎて湯尾峠をこゆれば、巖が城、
 歸山に初雁を聞きて、十四日の夕暮、敦賀の津に宿をもとむ。その
 夜月殊に晴れたり。明日の夜もかく有るべきにやと云へば、越路
 のならひ、猶あすの夜の陰晴はかりがたしと、あるじに酒すゝめら
 れて、氣比の明神に夜參す。仲哀天皇の御廟なり。社頭神さびて
 松の木の間に月のもり入りたる、おまへの白砂、霜を敷けるが如し。
 そのかみ遊行二世の上人、大願發起の事ありて、みづから草を刈り、
 土石を荷ひ、泥濘をかわかせて、參詣往來の煩なし。古例今にたえ

ず、神前に眞砂を荷ひ給ふ、これを遊行の砂持と申し侍ると、亭主の
 かたりける。

月清し遊行のもてる砂の上

十五日、亭主のことばにたがはず、雨降る。

名月や北國日和さだめなき

十六日、空晴れたれば、ますほの小貝ひろはんと、種いづの濱に舟を走
 らす。海上七里あり。天屋某といふもの、破籠さゝえなど、こまや
 かにしたゝめさせ、僕あまた舟に取りのせて、追風時の間に吹きつ
 けぬ。濱はわづかなる蟹の小屋にて、侘しき法花寺あり。こゝに
 茶をのみ酒を暖めて、夕昏の淋しさ感にたへたり。

寂しさや須磨に勝ちたる濱の秋

浪の間や小貝にもまじる萩の塵

其の日のあらまし、等裁に筆をとらせて寺にのこす。路通も此
 の港まで出でむかへて、みのゝ國へと伴ふ。駒にたすけられて大

浪の間や、
 芭蕉句選「小萩
 ちれますほの小
 貝小盃」

如行
近藤氏、大垣藩士

垣の庄に入れば、曾良も伊勢より來り合ひ、越人も馬をとばせて、如行が家に入りあつまる。前川氏、荆口父子、その外したしき人々、日夜とぶらひて、蘇生の者に逢ふがごとく、且悦び且いたはる。旅のものうさもいまだやまざるに、長月六日になれば、伊勢の遷宮拜まんとまた舟にのりて、
蛤のふた見にわかれ行く秋ぞ

俳句

元朝の見るものにせん富士の山

宗鑑

春寒きさし

にがくしいつまで嵐ふきのたう
手をついて歌申上ぐる蛙かな
月に柄をさしたらばよき團扇かな
稽小木に知らすな蓼の花ざかり

田に虫の多くつける年

大王の國もおそれぬ田虫かな
風寒し破れ障子の神無月

俳句

宗因
「やがて見よ梅くらげせん蓼の花」

俳句

衣通姫
一わがせこがくべ
き宵なり笹蟹の
蜘蛛の振舞かれて
しるしも

元朝や神代の事も思はるゝ
落花枝にかへると見れば胡蝶かな
勢子のもの來べき宵なり泊り狩

子をまうけたる人興行

ねぶらせて養ひたてよ花の雨
花よりも團子やありて歸る雁
夏の日にむされて咲くや柑子花
皆人のひるねの種や秋の月
冬ごもり虫けらまでも穴かしこ

我等しきが宿にも來るや今朝の春

よしのにて

守武

貞徳

貞室

其角
一こればくさば
かり散るも櫻か
白樂天
一三五夜中新月
色二千里外故
人行心
平中納言は
云ふ

これはくさばかり花の芳野山
松かげや月は三五夜中納言

西武

からく身になり果てゝなんと蟬
芋も子を生めば三五の月夜かな
銀もちのあたゝかさうに亥の子かな

重頼

やあしばらく花に對して鐘つく事
順禮の棒ばかり行く夏野かな
秋やけさ一足に知る拭ひ縁

長崎にて

もめん帆やもろこし船も雲の峯
料理あり錢に冬なし旅もなし

季吟

俳句

論語
祭如在。祭神如神在。一
阿波内侍に粟をか
けたり

一難波津に咲くや
この花冬ごもり
今を春へさ咲く
やこの花

也有
一よい時に桶屋休
んで時鳥
一西行
一年たけて又こゆ
命なりけりさや
の中山

孫

句
一僕とぼく／＼ありく花見かな
まざくといますが如し魂祭
女郎花たとはゞあはの内侍かな

宗

因

書初や行年七十攝州住
浪花津にさく夜の雨や梅の花
世の中や蝶々とまれかくもあれ
菜の花や一本咲きし松のもと
松に藤蛸木にのぼるけしきかな
時鳥いかに鬼神もたしかにきけ
有明の油ぞ残るほとゝぎす
藥罐屋も心してきけほとゝぎす
命なり素湯の中山香齋散
しら露や無分別なる置きどころ

風にのる川霧輕し高瀬舟

西行像説

秋はこの法師すがたの夕べかな
秋やくるのう／＼それなる一葉舟
やどれとは御身いかなるひと時雨
宇治にて
里人のわたり候か橋の霜
鴨の足は流れもあへぬもみぢ哉

西

鶴

むかし男の眺めすてし片野の花にゆきて

なんと世に櫻が咲かず下戸ならば
本丸の古道うづむ馬酔木かな

袖をつられて見し花も絶えて女中着る物を今朝名残ぞかし

長持に春ぞくれゆく更衣

古今
一山川に風のかげ
たる櫛は流れも
あへぬ紅葉なり
けり

俳
句

深草の高僧、元
政上人

俳句

元政の軒かこうたる 藜あかきかな

闇はあやなし川舟の車の音浪の聲をしるべぞかし

五月雨や 淀の小橋の 水行燈

ある皇子の忍び歩 行や初鳥狩

鯛は花は見ぬ里も ありけふの月

其角
「鯛は花は江戸に
生れて今日の
月」

人間五十年の窮りそれさへ我には餘りたるにまして

浮世の月見過しに けり末二年

來山

大抵
「髭につく飯さへ
みえず猫の妻」

元日や されば野川の 水の音
三味線も小歌もの らず梅の花
兩方に髭がある なり猫の戀

住吉にて

はる風にしる 鷺白し松の中

飯蛸のあはれや あれではてるげな

芭蕉
「うぐひすや餅に
糞する縁の先」

俳句

見かへれば 寒し日暮の 山櫻
花咲いて死にとも ないが病かな
若楓一ふりふつて 日が照つて
涼しさに四橋を 四つわたりけり
秋たつやはじか み漬も澄みきつて
添竹もないに 健氣りなげに此の菊の
我が寝たを首上 げて見る寒さ哉
僧ひとり 師走の野道 梅の花

大坂も大阪まん中に住んで

お奉行の名さへ 覺えず年暮れぬ

鬼貫

鶯が梅の小枝に 糞をして
草麥や雲雀があ がるそれさがる
春の日や庭に雀の 砂浴びて

俳

句

人の親の鳥追ひけり雀の子

二月夫惟然に訪はれてのち饒別

いなうとの花の前なりや留められぬ
から井戸へ飛びそこなひし蛙かな
一鍬や折敷に載せし葦草
竹の子や雪隠にまで嵯峨の坊
やれ壺に澤潟細く咲きにけり
飛ぶ鮎の底に雲行く流かな
行く水や竹に蟬鳴く相國寺

夕涼

なんと今日の暑さはと石の塵を吹く
そよりともせいで秋立つ事かいの

家は汐津橋さいふ橋のほさり也。前には軒の松風流水にひたして猶ひや、かに、後には野徑の虫、時しも野分に吹き送りにて、おのれくが聲かすかなり。今は闇なればやがて月のためにはさ楽しく覺えて

關がりの松の木さへも秋の風

向ふは堂島の新地家建ちならび、舟きはふ堀江の川嵐に、四海の浪を忘れ入日を惜しむ歸帆、半ばは屋上に見越して、姿知らぬ旅人の別れを思ふだに、此夕べは更にもかなし

須磨の秋の風のしみたる帆莖か
によつぼりと秋の空なる富士の山
行水の捨所なき蟲のこゑ
縦の木のずんと立たる月夜哉
古寺に皮むく棕櫚の寒げなり
何と菊のかなぐられうぞ枯れてだに

宇治にて

冬枯や平等院の庭の面
川越えて赤き足ゆく枯柳

高野の玉川

谷水や風に漂ふ月の糞

野田の玉川

俳

句

いざさらばどびろく飲うで千鳥きこ

よく見れば薺花さく垣根かな

乙州が江戸へ赴く時

梅わかな鞠子の宿のとろゝ汁
春雨や蜂の巣つたふ屋根の漏
何の木の花とも知らず匂かな
落ちざまに水こぼしけり花椿
山路来て何やらゆかし葦草
阿蘭陀も花に來にけり馬に鞍
春の夜は櫻に明けてしまひけり

憂方知酒清、貧始覺錢神

花にうき世わが酒白く飯黒し
菜畑に花見顔なる雀かな

鬼貫 鶯の鳴けば何や
頼政 花さかばつつけよ
一花さかばつつけよ
使は來たり馬に
鞍おけり
西行 ますげ生ふる荒
田に水をまかす
れば嬉し顔にも
なく蛙かな

翌は檜木さかや谷の老木のせいへる事あり、きのふは夢と過ぎて明日はいまだ來らず、た
だ生前一櫛のたのしみの外に翌はくさ言ひくらしして終に賢者の讒をうく

さびしさや花のあたりの翌ならう

丹波市さかやいふところにて日の暮れかゝりけるに

草臥れて宿かるころやふじの花

望湖水惜春

行春を近江の人とをしみける

きすこさいふ魚を網して眞砂の上にはし散らしけるを、鳥の飛來りてつかみ去るをにくみ
て、弓をもておどすぞ海士のわざと見えす、もし古戦場の名残をさどめて、かゝる事を
なすにやさいと罪深く、猶むかしの戀しきまゝに

須磨の蟹の矢先に啼くや子規

嵯峨にて

蜀魂大竹藪をもる月夜

うき我をさびしがらせよかんこ鳥

落柿舎にて

士明 一太秦は竹ばか
りなり夏の月
乙由 一閑古鳥われも
淋しいか飛でゆ

燕村 一春惜む宿やあ
ふみの置火燈

五月雨や色紙へきたる壁の跡

明石夜泊

蜻壺やはかなき夢を夏の月
稻妻や闇の方ゆく五位の聲
ひや／＼と壁をふまへて晝寝かな
三井寺の門たゝかばや今日の月
棧や命をからむ蔦かづら
霧雨の空を芙蓉の天氣かな
猪もともに吹かるゝ野分かな
吹きとばす石は淺間の野分哉
秋かせや藪もはたけも不破の關
この道や行く人なしに秋の暮
菊の香や奈良には古き佛たち

江戸を立出るまで

去來
「燕の羽しかいつ
くろひの初時
雨」

旅人とわが名呼ばれむ初時雨
初しぐれ猿も小袋をほしげなり
金屏の松の古びや冬ごもり

十月八日旅中吟

旅に病んで夢は枯野をかけめぐる
貧山の釜霜に啼くこゑ寒し
いざ子供はしりありかむ玉あられ
鹽鯛の齒ぐきも寒し魚の棚
によき／＼と帆柱さむき入江哉
住みつかぬ旅のこゝろや置火燧

伊良古崎は南の海のはてにて、鷹のはじめて渡る所といへり。いらこ鷹など歌にもよめり
と思へば、猶あはれなる折ふし

鷹一つ見付けてうれしいらこ崎
生きながら一つに氷る海鼠哉

山海經
「豊山之鐘霜降而
鳴」

俳句

旅寝ながらに年のくれければ
としくれぬ装着てわらちはきながら

芭蕉曾良 錢別

松島の松陰にふたり春死なむ
春もはや山吹白く萱苦し
池に驚なし假名かき習ふ柳陰

鎌倉一見の頃

目には青葉山郭公はつ鯉
浮葉巻葉立葉折葉と蓮涼し
鳥うたがふ風蓮露を磔けり
西瓜ひとり野分をしらぬ朝かな
いづくしま
回廊に潮みちくれば鹿ぞ啼く
南瓜やすつしり落ちて暮淋し

素堂

杉風

芭蕉
一名月や池をめぐ
りて夜もすが
ら
宗祇
一名も知らぬ小草
花さく川へ哉

俳句

子や待たんあまり雲雀の高あがり
提灯の空に詮なし時鳥
がつくりとぬけそむる齒や秋の風
鐘の音物にまぎれぬ秋の風
川ぞひの鳥をありく月見かな
菊畑おくある霧のくもりかな
名はしらす草毎に花哀なり
凧に何やら一羽寒げなり
巻きつきしその草ともに枯かづら
鶯に手もと休めん流しもと
孫を愛して
麥藁の家してやらん雨蛙

智

月

五

俳

句

淋しさを我もの顔や秋の鳩
雪の夜や臙豆腐のなつかしさ

其角

日の春をさすがに鶴のあゆみ哉
鐘ひとつ賣れぬ日はなし江戸の春

無車馬喧

夕日影町中にとぶ胡蝶かな

芳野山ぶみして

明星やさくらさだめぬ山かつら
越後屋に絹さく音や更衣

ほととぎす一二の橋の夜明かな

七十餘の老醫身まかりて弟子どもこぞりて泣くまゝ、予に追善の句を乞ひける。その老醫のいまそかりける時さらに見しれる人にもあらず、哀にも思ひこらすして、古來稀なる年にこそなどいへど、さかく許さざりければ

六尺もちからおとしや五月雨

自愧

かたつぶり酒の肴に這はせけり

夏の月蚊を疵にして五百兩

夜着をきてあるいて見たり土用干

白雨にひとり外見る女かな

夕だちや家をめぐりて啼く家鴨

傳九郎が持ちし扇に

朝比奈の樂屋へ入りしあつさ哉

投げられて坊主なりけり辻角力

あさざりに一の鳥居や波の音

歟此夕愁人は猿の聲を釣る

聲かれて猿の齒白し峰の月

名月や壘の上に松のかげ
たけがりや鼻の先なる歌がるた

俳

句

二

蘇東坡
一春宵一刻值千金、花有清香月有陰
去來
一鑑着て疲ためさむ土用干

去來
一松茸や人にさらる、鼻の先

蜀山人
の庵の歌のかりは
し手もにありて
れぬ茸符

併

句

爐開や汝をよぶは金の事

周防殿は才ある人にて、政事行はるゝに一生非なし、ひなきをめでて板倉殿と申すこかや。
此中より錢を拾ひて

こたつから青砥が錢をひろひけり
炭屑にいやしからざる木の葉哉
此の木戸や鎖のさゝれて冬の月
使ひとり書院へ通る寒さ哉
行幸の牛洗ひけり年のくれ

嵐雪

元日やはれて雀のものがたり
ぬれ縁や薺こぼるゝ土ながら
梅一輪一りん程のあたゝかさ
石女の難かしづくぞあはれなる
順禮にうちまじり行く歸雁かな

源氏物語・横笛
御齒のおひいて
るにくひあていづ
さて笋をつまみ
りて栗もよこさ
くひぬらし給へ
ば云々

後嵯峨院
あしすだれ夕暮
かけて吹く風に
秋の心や動きそ
めぬる

併

句

蛇いちご半弓提げて夫婦づれ
秋風の心うごきぬ繩すだれ
眞夜半やふりかはりたる天の川
名月や烟這ひゆく水のうへ

元

出かはりや幼心にもものあはれ
古庭にあり來りたるぼたん哉
竹の子や兒の齒ぐきのうつくしき

坂本の宿にさまりたるに、樅木つみたる火たき屋の隅に、具足と太刀の埃にまじりて侍りけるを持ち傳へたる故やあるさたづねければ、爰のならばしにてかばかりの器具もたらぬ家は待すま申しける、心にくかりける

なめくじり這うて光るや古具足
文もなく口上もなし粽五把

紀の山紀の浦海に入り江にいる、禹益の水を治めて異物をしるせる海外山表のありさま。
ルスンカボチャなどいふ遠津島根の人からは書にのみ見たり。目前に南のえびすの洞にかくれいはほに走るを、鬼にもせよ人にもせよ、こゝろおかるゝ旅寝なり

杜牧 千里鶯啼綠映
紅水村山廓酒
旗風 南朝四百
八十寺 多少樓
臺烟雨中

俳

句

はせ、釣や水村山廓酒旗、風
百菊をそろへけるに

黄菊白菊其外の名はなくもがな
ふとん着て寝たる姿や東山

冬の日客をもてなす

君見よや我が手入るゝぞ莖の桶
門の雪白とたらひの姿かな

鶯や茶の木畑の朝月夜

朝ごとに同じ雲雀か屋根の空

大原や蝶の出て舞ふ朧月

鶯の輪の崩れて入るや山櫻
花曇田螺のあとや水の底
時鳥なくや湖水のさゝ濁り
菜種殻焚くや野風の子規

丈

艸

三

木曾川のほざりにて

ながれ木や篝火の上の不如歸
白雨に走り下るや竹の蟻
稻妻のわれて落つるや山の上
つれのある所へ掃くぞきりくす
病人と撞木に寝たる夜寒かな

越中翁塚手向

入る月や時雨るゝ雲の底光り

ばせを翁の病床に侍りて

うづくまる薬の下の寒さかな
しまき来る雪の黒みや雲の間
狼の聲そろふなり雪の暮
淋しさの底ぬけて降る霰哉
水底を見て来た顔の小鴨哉

俳

句

三

俳

句

ほたくと朝日さしこむ炬燵かな

賞 交

まじはりは紙衣の切を譲りけり

去 來

元日や家にゆづりの太刀佩かん

上り帆の淡路はなれぬ汐干かな

鉢たつき來ぬ夜となれば臙なり

うごくとも見えて畑打つ男かな

何事ぞ花見る人の長刀

石垢になほくひ入るや淵の鮎

湖の水まさりけり五月雨

石も木も眼に光るあつさかな

蠅ならばはや初秋の日數かな

岩端や爰にもひとり月の客

太祇
「飛石にさかきの
光る曇さかな」

三

魂柳の奥なつかしや親の顔
秋風やしら木の弓に弦はらん
鳶の羽もかいつくろひぬ初しぐれ
一時雨しぐれてあけし辻行灯
こがらしの地にも落さぬ時雨かな
荒磯やはしり馴れたる友千鳥

園 女

鼻紙の間にしばむ董かな

四月朔日當麻寺にて

更衣みづから織らぬ罪深し

負うた子に髪なぶらるゝ暑さ哉

小原女や野分に向ふ抱帯

凡 兆

鶯や下駄の齒につく小田の土

俳

句

三

越より飛驒へゆくこて籠の渡の危きころく道もなき山路にさまよひて

鷺の巢の樟の枯枝に日は入りぬ
花散るや伽藍の樞落しゆく
骨柴の刈られながらも木の芽かな
曙や董かたむく土龍
ほととぎす何もなき野の門構
渡りかけて藻の花のぞく流かな
上行くと下来る雲や秋の空
初潮や鳴戸の波の飛脚船
灰汁桶の雫やみけりきりくす
時雨るゝや黒木つむ屋の窓明り
禪寺の松の落葉や神無月
呼かへす鮎賣みえぬ葎かな
下京や雪つむ上の夜の雨

浪化

長々と川一筋や雪の原
古寺の簀子も青し冬がまへ
水鳥の胸に分けゆく櫻かな
つりそめて蚊屋のにはひや二三日
白砂やしよろりと生えし今年竹
冷々と小路へはひる残暑かな
馬宿にすそ湯沸すや霧も立つ
秋風の吹きぬく舟の世帯かな
名月や土手のはづれのなびき藪
林紅亭
移の花のこぼれや四十雀
木枯や片店おろす町通り
水仙や藪のつきたる賣屋敷

糞とりの年玉寒し洗ひ蕪
 買立の足駄のたけや春の雪
 町中や座頭をよけて飛ぶ乙鳥
 清水の上から出たり春の月
 芋を煮る鍋の中まで月夜かな
 きりくす鳴くや夜寒の芋俵
 十團子も小粒になりぬ秋の風
 大髭に剃刀のとぶ寒さかな
 茶の花の香や冬枯の興聖寺
 梅咲くや赤土壁の小雪隠
 風呂敷へ落ちよ包まむ舞雲雀
 乙鳥や赤土道のはねあがり

許六

惟然

朝露に甕車や草のうへ
 凧や刈田の畔の鐵氣水
 鶉の糞の白き梢や冬の山
 しがみつく岸の根笹の枯葉かな
 水鳥やむかうの岸へつういつい
芋餡汁は宗因の洒落、奈良茶漬は芭蕉の清貧
 冬籠人にももの言ふことなかれ
 しぐれけり走り入りけり晴れにけり

上野

大佛のうしろに花のさかりかな

伏見の夜舟にて

ほのくぼに雁落ちかゝる霜夜かな
 火桶抱いて頤臍をかくしけり
 鳥どもも寝入つて居るか余吾の海

路通

いね／＼と人に云はれつ年の暮

野坡

「茶
の寝並んで遠夕立
の評議かな」

長松が親の名で来る御慶かな
はき掃除してから椿散りにけり
苗代や二王のやうな足の跡
行く雲を寝て居て見るや夏座敷
この頃の垣の結目や初時雨
小夜時雨隣の白は挽きやみぬ
燈火も動かで丸し冬ごもり

涼苑

鉞さげて叱りに出るや桃の花
つかむ手の裏を這うたる螢かな
木枯の一日吹いて居りにけり
汁鍋のあとむつかしや冬籠

支考

「其角
の西瓜くふ奴の髭
の流れけり」

船頭の耳の遠さよ桃の花
馬の耳すばめて寒し梨の花
歌書よりも軍書に悲し吉野山
片枝に脈や通ひて梅の花
出女の口紅惜しむ西瓜かな
牛叱る聲に鳴立つ夕かな
腸に秋のしみたる熟柿かな

六

乙由

燕や何を忘れて中がへり
月花の目をやすめばや子規
夕立や智恵さまぐの被り物
浮草や今日はあちらの岸にさく

也 有

俳

句

くさめして見失ひたる雲雀かな
 足と鍬三本洗ふ田打かな
 小便はよその田へして早苗とり
 蠅が来て蝶にはさせぬ午睡かな
 物まうの聲に物着る暑さかな
 仲國が耳に邪魔なる砧かな
 足許の豆ぬすまるゝ案山子かな
 庭ばかり流行る醫者ありけふの菊
 拾うたを嗅げば坊主の頭巾かな

太
祇

川柳
 蠅が来て晝寝の
 顔を皺にする

大江丸
 眼をあけて聞いて
 居るなり花の
 春

目をあけて聞いて居るなり四方の春
 羽根つくや世ごころ知らぬ大またげ
 川の香のほのかに東風の渡りけり
 川下に網うつ音やおぼる月

蕪村
 高麗舟のよらで
 過ぎ行く霞哉

欺いて行きぬけ寺や朧月
 家内して覗きからせし接木哉
 出替や朝飯すわる胸ふくれ
 人音にこけこむ龜や春の水
 大船の岩におそるゝ霞かな
 ふりむけば燈ともす關や夕霞
 山路来て向ふ城下や凧の數
 行く女裕着なすや憎きまで
 蚊屋つるや夜學を好む眞裸
 うつす手に光る螢や指のまた
 とり逃がす隣の聲や行く螢
 甘き香は何の花ぞも夏木立
 銚處々にゆふ風そよぐ囃子かな
 角出して這はでやみけり蝸牛

俳

句

三

暑き日に水からくりの濁かな
 白雨や膳最中の大書院
 獨言いうて立ち去る清水かな
 帷子や蠅のつと入る袖のうち
 橋落ちて人岸にありて夏の月
 初戀や燈籠によする顔と顔
 着物のうせてわめくや辻角力
 彼の後家のうしろに踊る狐かな
 十三夜月は見るやと隣から
 寢よといふ寢覺の夫や小夜砧
 玄關にお傘と申す時雨かな
 冬枯や雀のありく戸樋の中
 寒月の門へ火の飛ぶ鍛冶屋哉
 聞がりの柄杓にさはる氷かな

几童
 「欠して月ほめて
 居る隣かな」

古今
 「みさむらひ御笠
 こ申せ宮城野の
 木の下露は雨に
 まされり」

蕪村

下戸ひとり酒に逃げたる火燧かな
 犬にうつ石の扱なし冬の月
 白梅や墨芳しき鴻鷗館
 畑打や法三章の札のもと
 公達に狐化けたり宵の春
 指南車を胡地に引去る霞かな
 瀧口に燈を呼ぶ聲や春の雨
 初午や物種うりに日のあたる
 静さに堪へて水澄む田螺かな
 片町にさらさ染むるや春の風
 つゝじ咲いて石移したる嬉しさよ
 喰うて寝て牛になればや桃の花
 菜の花や月は東に日は西に

碧梧桐
 「上京や友禪洗ふ
 春の水」

夢水
「時鳥平安城も見
おろさず」

併

句

瘦臙の毛に微風あり更衣
お手討の夫婦なりしを更衣
ほとゝぎす平安城を筋違に
牡丹散つてうちかさなりぬ二三片
かきつばたべたりと鶯のたれてける
鮎くれてよらで過ぎ行く夜半の門
短夜や小店あけたる町はづれ
古井戸の蚊に飛ぶ魚の音くらし
旅芝居穂麥がもとの鏡たて
さみだれや大河を前に家二軒
青飯法師にはじめて逢ひけるに、舊識のごさくかたり合ひて
水桶にうなづきあふや瓜茄子
石工の鑿冷したる清水かな
心太逆しまに銀河三千丈

四五人に月落ちかゝるをどりかな

遊行柳のももにて

柳散清水涸石處々
白露や茨の刺にひとつづゝ
日は斜關屋の鎗にとんぼかな
月天心貧しき町を通りけり
かなしきや釣の糸吹く秋の風
三徑の十歩につきて蓼の花
鳥殿殿へ五六騎いそぐ野分かな
秋風や酒肆に詩うたふ漁者樵者
しぐるゝや鼠のわたる琴の上
化けさうな傘かす寺の時雨かな
大徳の糞ひりおはす枯野かな

凡董と浪華より歸るさ

歸去來辭
一三徑就荒、松菊
猶存
二凡董
鳥羽殿へ御使
や夜半の雪
曉臺
一古琴や鼠出て行
く春の暮
川柳
「化けさうなので
もよいかさ傘を
貸し」

併

句

三

芭蕉
「葱白く洗ひあけ
たる寒さかな」
荊軻
「風蕭々兮易水
寒壯士一去兮
不復還」

去來
「たま／＼に三日
月拜む五月哉」

虚子
「燈灯に落花の風
の見ゆるかな」

蕪村
「日歸りの元山越
る暑さかな」

俳句

霜百里舟中に我月を領す
易水にねぶか流るゝ寒さかな
斧入れて香におどろくや冬木立
玉霰漂母が鍋をみだれうつ
寒月や衆徒の群議の過ぎて後
鯨賣市場に刀を鼓しけり
世の中は三日見ぬ間に櫻かな
むつとして戻れば庭に柳かな
五月雨やある夜ひそかに松の月
蟲干や紙魚聲あらば句や鳴かん
名月や生れかはらば峰の松
わが影の壁にしむ夜やきり／＼す
猫の目のかまどに光る寒さかな

夢太

燈火を見れば風あり夜の雪

麥水

俳句

出て遊ぶ繪馬の沙汰あり臙月
水のない川掘る人や桃の花
椿落ちて一僧笑ひ過ぎ行きぬ
子規几帳はなるゝ人の影
夏日涼し是竹に依て起る風
松一里歸路暑き日を荷ふかな
鴉なく秋の柳や長づつみ
枯蘆や低う鳥立つ水の上
水仙や此花のもとの飯袋子
繪草紙に鎖おく店や春の風
勅額の尊く霞む櫻かな

几臺

三

青海苔や石のくぼみの忘れ沙
 かしこくも花見に來たり明日は雨
 蚊遣木にたま〜沈の句ひ哉
 水のめば腹のふくる暑かな
 涼しさや遠く茶運ぶ寺扈從
 山寺や縁の下なる苔清水
 稻妻や山城の山河内の川

高雄山

紅楓深し南し西す水の隈
 いたく降ると妻に語るや夜半の雪
 貫之が船の灯による千鳥かな

召波

雛の宴五十の内侍酔はれけり
 たんぼもけふ白頭にくれの春

「蕪村
 猿どの、夜寒さ
 ひゆく死かな」

淋しさは天井高し寺の蚊屋
 短夜や老知りそむる食もたれ
 白馬寺に如來うつしてけさの秋
 子の顔に秋風白し天瓜粉
 傘の上は月夜の時雨かな
 憂きことを海月に語る海鼠かな

火魯

「鳴雪
 山僧の太刀洗
 ふ清水かな」

足袋脱いで小石振ふや董草
 古雛や櫻がくれのうらみ顔
 箏やひとり弓射る屋敷守
 午睡さむれば眞桑よき程に冷えたり
 悪僧の天窓冷せし清水かな
 衣擣つ女疲れて月は西
 山風や霰ふきこむ馬の耳

子規
「秋暗れてものの
櫛の空に入る」

俳句

紅梅や檜垣くづれて臘月
梅に月朗詠うたふ人あらん
日くれたり三井寺下る春の人
秋の山ところくくに煙立つ
曉や鯨の吼ゆる霜の海
蠅一つわれをめぐるや冬籠

曉臺

紙漉きの手許に散るや春の雪
陽炎のもえて漂ふ浮木かな
春風や肩に乗る子の振り鼓
五月雨や鼠の廻る古葛籠
水ありや家鴨の覗く萩の下
枯蘆の日にく折れて流れけり

関更

白

人戀し灯ともし頃を櫻散る
夕潮や柳がくれに魚わかづ
二股になりて霞める野川かな
花芥子にくんで落ちたる雀かな
めくら子の端居淋しき木槿かな
寒月や石切山の石佛

士朗

大蟻の壘を歩く暑さかな
名月に露の流るゝ瓦かな
足輕のかたまつて行く寒さかな

大江丸

元日や此時人壽二萬歳
千兩のかくし妻あり杜若

俳句

三

俳

句

宇治殿の障子立てけり麥のあき
 白團扇隣の義之に書かれけり
 夏瘦や西日さしこむ竹格子
 秋來ぬと目にさや豆のふとりかな
 霧雨に小室うたふはたれが馬
 去年賣りし牛にあひけり秋の風
 花すゝき吹かれながらに日は入りぬ

尾さいふ題にて

清盛の文張つてある火燧かな

東風吹いて小松がもとの土筆かな
 虎杖の二葉に見るや雉の糞
 花の雨てり／＼小法師まけにけり
 あゝ瘦せたり命うれしき蚊帳のうち

冥

々

三

六

二

六

六

三

口

三

子規
 一めでたさも一茶
 位や雑煮餅

俳

句

酒桶を乾かす日なり茨の花
 晝顔のもとに氣を吐く石韻かな
 おとろへし鶺鴒の夢や今朝の秋
 老いて行く長者に子なき寒さかな
 川千鳥月は林にかくれけり
 寒菊や塵のつもりし琴の上
 めでたさも中位なりおらが春
 鳴く猫に赤ん目をして手毬かな
 雀の子そこのけ／＼お馬が通る
 玉川やまづお先へと飛ぶかはづ
 蛙たゝかひさいふを見にまかる。四月二十日なりけり
 瘦蛙負けるな一茶これにあり
 晝めしをたべに下りたる雲雀かな

一

茶

三

俳

句

長閑さや淺間の煙晝の月
陽炎や手に下駄はいて善光寺
春雨や食はれ残りの鴨が鳴く
晝の蚊やだまりこくつて後から

粒々皆辛苦

もたいなや晝寝して聞く田植唄
大螢ゆらりくくと通りけり
我袖を親とたのむか逃げ螢
やれ打つな蠅が手をする足を

新潟にて

下駄ころりからり彼奴等が夕納涼

裏屋のつきあたりに住す

涼風の曲りくねつて來りけり
蟻の道雲の峰よりつゞきけり

木曾山に流れ込みけり天の川
稻妻やうつかりひよんとした顔へ
秋風や壁のへまムシヨ入道
寝がへりをするぞ脇よれきりくす
泣くなとて母が踊るや門の月
名月の御覽の通り屑家かな
けふもくゝ糸引すつて蜻蛉かな

善光寺御堂庭乞食

重箱の錢四五文や夕しぐれ
芝原や小春仕事に塗る鳥居
づぶぬれの名を見る火燧かな
門先にちよいと渦く木の葉かな
大根引大根で道を教へけり
朝晴にばちくゝ炭の機嫌かな

俳

句

四

四

俳

句

うまさうな雪がふうはりくと
梟よのほゝん所か年の暮
節季候や七尺去つて小節季候

元日や鬼ひしぐ手も隣の上
折兼ねてあはれのさめる木槿かな
京の鐘聞ゆる里の小春かな

柴の戸を左右へあけて花の春
鶯や隣まできてひまのいる

春風にこぼれて赤し齒磨粉
雪残る頂一つ國境
菜の花や小學校の晝餉時

梅室

蒼虬

子規

吳

病間あり

足の立つうれしさに萩の芽を検す
早鮓や東海の魚背戸の蓼
蚊をたゞくいそがはしさよ寫し物
麻刈りて鳥海山に雲もなじ
夏葱に鶏裂くや山の宿
河骨の水を出かぬる苔かな
藻の花や水ゆるやかに手長鰻
犬が来て水のむ音の夜寒かな
山門をぎいと鎖すや秋の暮
椎の木を伐り倒しけり秋の空

最上川

朝霧や舟かゝり居る裏戸口
縁日へ押出す菊の車かな

俳

句

巳

俳

句

夕鳥一羽おくれてしぐれけり
並べけり火燧の上の小人形
むつかしく炭團に炭をつぎかけし
麥蒔やたばねあげたる桑の枝

只

鳴雪

元日や一系の天才不二の山
汁椀に大蛤の一つかな
城門に蝶の飛びかふ日和かな
矢車に朝風強き幟かな
ほととぎす遠侍の斬かな
貰ひ来る茶碗の中の金魚かな
與謝の海や藍より出で夏木立
名月や橋高らかに踏みならし
残る蚊に蒲團を被るひとりかな

初冬の竹緑なり詩仙堂
冬の夜や小犬啼きよる窓明り
二君には仕へ申さぬ紙衣かな

碧梧桐

畑打の四五人よりし晝餉かな
短夜や町を砲車の過ぐる音
簀の中のゆるき流れや水馬
遠花火音して何もなかりけり
蜻蛉や西日静かに稻菴
ありといふ小屋にも出でず冬木立
大鍋にくづれて甘きかぶらかな
楠の根を静かにぬらす時雨かな

虚子

俳

句

松立てし官署や人に親しめり

児

俳

句

大船の尻振りかはる日永かな
 もたれあひて倒れずにある雛かな
 曝書風強し赤本飛んで金平怒る
 今日の日も衰へあほつ日除かな
 灯ともせばはやそこ飛べり火取蟲
 秋立つやまこと貌なる物狂ひ
 鶏の空時つくる野分かな
 桐一葉日當りながら落ちにけり
 足早き提灯を追ふ寒さかな
 青き色の残りて寒き干菜かな
 春の夜や灯を圍み居る盲達
 鬮鶏の眼つぶれて飼はれけり
 小百姓の嬉しき布施や草箒

鬼城

芭蕉
「此道や行く人な
しに秋の暮」

夏草に這上りたる捨蠶かな
 街道やはてなく見えて秋の風
 瘦馬のあはれ機嫌や秋高し
 娼家の灯うつりて海の無月かな
 飼猿や巢箱を出で、月に居る
 土くれに二葉ながらの紅葉かな
 庵主や寒き夜を寝る頬冠
 小春日や石を噛み居る赤蜻蛉
 冬蜂の死に所なく歩きけり

連句

猿 蓑

市中は物のにほひや夏の月

暑しくと門々の聲

連

句

芭凡

三

蕉 兆 蕉 家 蕉 家 蕉 家 蕉 家 蕉 家 蕉 家 蕉 家

連

句

二番草取りも果さず穂に出で、

灰打ちたゞくうるめ一枚

此筋は銀も見知らず不自由さよ

只とひやうしに長き脇差

草むらに蛙こはがる夕まぐれ

露の芽取りに行燈ゆり消す

道心の發りは花の蒼む時

能登の七尾の冬は住み憂き

魚の骨しはふる迄の老を見て

待人入りし小御門の鎧

立ちかゝり屏風を倒す女子ども

湯殿は竹の簀子わびしき

茴香の實を吹落す夕あらし

僧やゝ寒く寺に歸るか

去

五二

兆 來 蕉 兆 來 蕉 兆 來 蕉 兆 來 蕉 兆 來 蕉 兆 來

猿曳の猿と世をふる秋の月

年に一斗の地子はかるなり

五六本生木つけたる水溜り

足袋ふみよごす黒ぼこの道

追立てゝ早き御馬の刀持

丁稚が荷ふ水こぼしたり

戸障子も筵がこひの賣屋敷

天上守りいつか色づく

こそくくと草鞋を作る月夜ざし

蚤をふるひに起きし初秋

その儘にころび落ちたる樹落し

ゆがみて蓋のあはぬ半櫃

草庵に暫く居ては打破り

命うれしき撰集の沙汰

連

句

五

來 蕉 兆 來 蕉 兆 來 蕉 兆 來 蕉 兆 來 蕉 兆 來 蕉

連

句

さま／＼に品かはりたる戀をして
うき世の果はみな小町なり
何故ぞ粥すゝるにもなみだぐみ
お留守となれば廣き板敷
手のひらに虱這はする花の蔭
震動かぬ書のねぶたさ

炭 俵

梅が香にのつと日の出る山路かな
ところ／＼に雉子の啼き立つ
家普請を春の手すきに取付て
上のたよりにあがる米の直
宵の中はら／＼とせし月の雲
藪ごし話す秋のさびしさ

番

兆 蕉 來 兆 來 蕉 來 坡 同 蕉 同 坡 蕉

野 芭

お頭へ菊貫はるゝ迷惑さ

娘をかたう人にあはせぬ

奈良通ひ同じつらなる細元手

今年は雨の降らぬ六月

預けたる味噌取りにやる向河岸

ひたといひ出すお袋の事

夜もすがら尼の持病をおさへける

蒟蒻ばかり残る名月

初雁に乗懸下地敷いて見る

露を相手に居合一ぬき

町衆のつらりと酔うて花の蔭

門で押さるゝ壬生の念佛

名 ちち風にこえのいきれを吹廻し

たゞ居るまゝに腕わづらふ

連

句

番

同 蕉 坡 同 蕉 坡 蕉 坡 蕉 坡 蕉 坡 同 蕉 坡 同 蕉

連

句

江戸の左右向ひの亭主のぼられて

此方にもいれどから白をかす

方々に十夜のうち鐘の音

桐の木高く月牙ゆるなり

門しめて黙つて寝たるおもしろさ

拾うた金で表がへする

初午に女房の親子振舞うて

又この春もすまぬ牢人

法印の湯治を送る花ざかり

繩手を下りて青麥の出来

どの家も東の方に窓をあけ

魚に喰ひ飽く濱の雑炊

千鳥啼く一夜くゞに寒うなり

未進の高の果てぬ算用

興

蕉 坡 蕉 同 坡 蕉 坡 蕉 坡 蕉 坡 蕉 坡 蕉

隣へも知らせず嫁をつれて来て

屏風のかげに見ゆる菓子盆

○

秋の空尾の上の杉に離れたり

おくれて一羽海渡る鷹

朝露に日傭揃へる貝吹て

月の隠るゝ四扉の門

祖父が手の火桶も落すばかりなり

傳ひ道には丸太ころばす

下京は宇治の糞舟さし連れて

坊主の着たる蓑はをかしき

足輕の子守して居る八つ下り

息吹きかへす霍亂の針

田のくろに早苗たばねて投げて置く

孤 其

蕉 坡 蕉 同 屋 角 同 屋 同 屋 同 屋 同 屋 角

連

句

五

連句

道者のはさむ編笠の節

行燈の引出し探すはした錢

顔に物着てうたゝ寝の月

鈴繩に銚のさはれば響くなり

雁のおりたる筏流るゝ

貫之の梅津桂の花もみぢ

むかしの子あり忍ばせて置く

いさ心跡なき金のつかひ道

宮の縮の新しきうち

夏草の蛎にさゝれてやつれけり

あばたといへば小僧いやがる

年の豆蜜柑の核も落散りて

帯解きながら水風呂を待つ

君來ねばこはれ次第の家となり

轉るるの世は常なる事

天

屋角屋角屋角屋

角屋角屋角屋同角屋角屋角屋角

稗と鹽との片荷つる籠

辛崎へ雀のこもる秋の暮

北より冷ゆる月の雲行

紙燭して尋ねて來たり酒の殘

上塗なしに張つて置く壁

小栗讀む片言ませて哀なり

けふもだらつく浮前の舟

孤屋旅立つ事出來て洛へのばりけるゆゑに、今四句未滿にして吟

終りぬ

屋角屋角屋角屋

連句

俳文俳句選終

天



印 檢

大正十五年五月十五日印刷
大正十五年五月二十日發行

俳文俳句選

定價金八拾錢

編者 藤井乙男

印刷者 鈴木常次郎

發行者 鈴木常松

發行所 修文館書店

東京市神田區表神保町二番地
大坂市東區博勞町五丁目
電話口座大坂四七一

修文館發行高等學校教科書及普通圖書

| | | | |
|-----------------|-----------|------|---------------------------|
| 友枝照雄編 | 現代高等國文 | 全一册 | 金壹圓八拾錢 |
| 修文館編輯部編 | 日本文學歷代選 | 全五册 | 近世編上下 上古中編上下 各金七拾八錢 |
| 錦織宗壽著 | 國文學史綱要 | 全一册 | 金貳圓 |
| 飯野哲二作 校閱者 | 日本文學史要 | 全一册 | 金壹圓貳拾錢 |
| 吉澤義則編 | 源氏物語要抄 | 全二册 | 各金六拾六錢 |
| 同 | 萬葉集要抄 | 全一册 | 金六拾壹錢 |
| 同 | 上古文要抄 | 全一册 | 金六拾五錢 |
| 沼波瓊音著 | 徒然草講話 | 全一册 | 金貳圓八拾錢 |
| 尾崎久彌著 | 類西行上人歌集新釋 | 全一册 | 金貳圓八拾錢 |
| 沼波瓊音著 長尾素枝共著 | 評註俳句選 | 第十版 | 金壹圓 |
| 沼波瓊音著 | 俳句の作法 | 第廿一版 | 金五拾錢 |
| 同 | 評短句壹萬 | 第十七版 | 金八拾錢 |

531
70

終